

# 黒い林檎

鐸木能光

(立ち読み版 プロローグ(第一章))

## プロローグ

公園の一角で鳴いていた蝉が急に鳴きやんだかと思うと、隣接する高級マンションの前に、大型のワンボックスカーが停まった。車体には電器店の名がペイントされている。

中から、作業服を着た男が二人出てきて、後ろのハッチドアを開けた。二人はダークグリーンの大型冷蔵庫を降ろし、キャスタ―に乗せてマンションの中に運び込み始めた。

管理人室の窓から、丸い眼鏡をかけた老人の顔が覗く。

冷蔵庫を訝しげに見ている管理人に、作業服の男の一人が帽子に手をかけて軽く会釈した。その間、もう一人がパネルの数字ボタンを押す。

オートロックのドアが開いた。

管理人は、住民の一人が冷蔵庫の配達を告げられ、部屋の中から入口のオートロックを解除したのだと信じて疑わなかったが、そうではない。作業服の男は、ボタンをいくつか押したただけで、一言も喋らなかつたのだから。

冷蔵庫と一緒にエレベーターの中に消えていく男二人を、管理人は無表情で見送った。

シャワーの音にかき消され、女の耳には、玄関ドアが開く音は聞こえなかった。

麻布の高級マンションの五階。玄関ドアは電子ロックだし、エントランスホール横には管理人が常駐している。彼女は今まで、自分の居住空間の安全性を疑ったことはなかった。

二度目のシャンプーを濯いでいるとき、背後でバスルームのドアが開いた気配がした。

振り向く間もなく、強い力で口をタオルのようなもので押さえられた。シャンプーや石鹸の香料とは異質のにおいが鼻を突く。

何が起きたのか判断する時間もないまま、彼女はバスルームの床に崩れ落ちた。

男の一人がシャワーを止めた。

もう一人が玄関に戻り、冷蔵庫を運び入れる。

冷蔵庫の扉を開けると、中には仕切り棚や冷凍庫などは一切なく、完全な空洞になっていた。コンプレッサーさえも取り外されて、ただのコンテナに加工されている。

男たちは浴室に倒れている女の身体をタオルで拭き始めた。

「三十八って言うてたか？ 身体は若いな」

背の高いほうの男が、女の乳房を弄びながら言った。

「遊んでる暇はないですよ。余計なことにはやるなど念を押されてるでしょ。血一滴流すなつて」

「ああ、分かっているさ。……それにしても、七十八の工口爺さんの妻か。世の中、金だな」

「いいから、入れますよ。そっち持って」

二人は用意してあった木綿地の布で女をぐるぐる巻きにし、まるで引っ越しの荷物を扱うように、冷蔵庫に手際よく押し込んだ。扉を閉めると、二人は冷蔵庫の表面に貼ってあったダークグ

インのフィルムを剥がし始める。フィルムを完全に剥がすと、白い冷蔵庫に変貌した。

入って来たときと同じように、二人の男たちはマンションの玄関を堂々と出ていった。

管理人は、白い冷蔵庫を運び出す二人を無言で見送った。運び込んだダークグリーンの冷蔵庫と同じ形、大きさなのだが、色が違っているので、まさか同じものだとは思わない。古くなった冷蔵庫を処分するために運び出しているのだと思いこんだのは当然だろう。

ワゴン車が走り去ってしばらくしてから、ずっと沈黙していた蝉が、再び懸命に鳴き始めた。

麻布のマンションに一人暮らしをしている三十八歳の独身女性が失踪したというニュースは、一週間経っても、いっこうに報じられる気配はなかった。

1409というプレートがあるドアの前に立ち、瀬名美智郎は、もう一度左右を見渡した。ホテルの廊下には誰もいない。

ドアフォンを鳴らす。しばらくして、チェーンをつけたままの状態ドアが二十センチほど開いた。

「山田様のご紹介のかたですね？」

隙間から顔を覗かせたのは、あどけない顔立ちをした黒髪の少女だった。

「そう」

「お待ちしていました。どうぞ」

すぐにドアが開き、瀬名は部屋の中に通された。

少女は瀬名にライティングデスク付属の椅子を勧めると、自分はベッドの縁に腰掛けた。

瀬名はサングラスを外し、改めて目の前の少女の全身を観察した。

最初に目を引いた黒い髪は、やはり染めておらず、背中の中程までまっすぐに伸びていた。

会社の制服のような紺色のスーツに黒のストッキング。まだ十代だろうに、真夏に似つかわしくない、律儀すぎる服装だ。

だが、その地味なファツションと顔の幼さのアンバランスが、瀬名には新鮮だった。化粧の仕方を知らず、口元にしまりのない少女たちには、完全に食傷している。

コンサート会場では、そんな女の子たちが全員立ち上がり、絶叫し、不揃いの波となつてうごめく。その光景に、最近では軽い吐き気を覚えることもある。

「シータです。よろしくお願いします」

黙っている瀬名に、少女はそう挨拶した。

「シータ？ 源氏名にしても妙な名前だね」

「ゲンジナ？」

「いや……芸名というか、ニックネームのこと」

「呼び名のことですね。淡泊でいいかなと思って。他の子もギリシア語の数字やアルファベットの名前をつけてるんです。テトラにラムダ」

「ふうん」

「お客様のお名前を教えてください。偽名でもいいですから。じゃないと、呼びにくいし」

シータと名乗った少女は、そう言いながら無邪気な眼差しで瀬名を見つめた。

この子は気がついていないのだと、初めて知った。

サングラスを外したときに、あるいは騒ぎ始めるかもしれないと思ったのに。マネジャーの濱口はどう説明していたのだろう。

「濱……いや、山田さん、何も言っただけじゃなかった？」

名乗る前に訊いてみた。

「いいえ……。あ、そうだ。びっくりするような有名人が来ても、絶対に秘密は守るようにと言われましたけれど……あの……もしかして、有名なかたなんですか？ ごめんなさい。私、テレビはほとんど見ないし、タレントさんってあまり知らないんです」

どうやらその言葉は嘘ではないらしい。

ステージで歌うときは、アイコンやシャドウを入れている。

今はほぼ素顔だが、それでもファンならば気がつくだろう。この子は、俺が「ミッチ」だと名乗っても分からないのかもしれない。

瀬名は、あっさり崩れた自信と、それ故に手に入れた安堵感の狭間で、思わず苦笑した。

瀬名美智郎は、CPUゼラというロックバンドのリードヴォー

カリストだった。

CPUゼラは、日本の芸能史上初めて、単独アルバムの売り上げが五百万枚を突破したカリスマ的バンドだ。

自分の正体を知られずにこの年代の少女を抱くなんて、いつ以来のことだろう。毎日のように新しい女に会うが、相手は最初から自分を知っている。自分にとっては今会ったばかりの未知の女なのに、女のほうは、自分に対してすでに特定のイメージを抱き、情報を得ている。ときには生年月日や血液型まで知られていることもある。「ファンだったら、そのくらい知ってるよ」と言っていて、嬉しそうに笑う女たち。

売れ始めた頃はそれが快感だったが、今ではそういう状況に疲れを感じる。

「じゃあ、ノツポさんでいいですか？ 背が高いから」

「え？」

「お名前です。教えていただけなら、勝手につけちゃいますよ」

「あ、瀬……川。瀬川だ」

「長谷川さんですね。よろしくお願いします」

咄嗟に一字変えた姓を名乗ったが、口ごもった分、少女は聞き違えた。なんでもいいので、そのまま訂正はしなかった。

少女は枕元に置いてあったバッグの中から、薬包紙に包まれたものを二つ取り出し、サイドテーブルの上に置いた。

「錠は、今ご利用ですよ？ 効果が現れるまでに少し時間がかかります」

「え？ ああ、それが例のやつか。じゃあ、今飲むよ」

「はい。じゃ、十万円、前金でお願いします」

清純そうな顔に似合わない、即物的な物言いだった。それまで瀬名が抱いていた一種ロマンチックな気分がたちまち壊れた。

「一錠、五万円つてわけか」

「いいえ。一錠一万円です。八万円は私のご奉仕料です」

奉仕？ まるで新興宗教の信者みたいなことを言う。あるいはアダルトビデオに出てくる召使いか。

瀬名は用意してきた十万円入りの封筒をテーブルの上に置いた。少女はそれを受け取り、さっと中身を確かめると、すぐにバッグにしまった。

十万円の札束も、今の瀬名にはパチンコ玉を買うための千円札程度の重みしかない。金はいくらでも使える。「物」を買うことにはとづくに飽きてしまった。欲しいのは物ではなく、退屈しない時間だ。あるいは、真に興奮できる新しい刺激。

マネジャーの濱口と飲んでいるとき、そんな話になった。

「本物の美少女つて、もう日本にはいないんじゃないのかな。チベットの山奥とか、ラップ人の村とかにまで行かないと、見つけられない気がする」

そう漏らした瀬名に、濱口は少し躊躇いながらも、この女子高生売春グループのことを教えてくれたのだ。

「見た目だけやったら、ごつつい美少女で、まだ日本にもいますよ。その子と、十万円で最高のエッチすることもできます。せやけど、ちょっとやばいんですわ。薬を使うよつて」

「ハツパ系？ それともシャブ系？」

「どつちともちやいますわ。フゲン<sup>ヘータ</sup>つて聞いたことありますやろ？ あれ、噂だけやのうて、ほんまにあるんですわ……」

濱口は、とろんとした目つきで、自分の体験を告白した。

最初は半信半疑で聞いていたのだが、濱口の口調があまりにもまじめなので、つい自分も試してみる気になったのだった。

そして今、目の前にいるシータというこの少女は、毎日彼に群がってくるグループピーたちとは確かに違う人種だった。

こんな女の子と二人で話ができるだけでも、十万円は高くないと思う。しかも、噂の「フゲン」までついている。当分、仲間内でこの話題を楽しめるだろう。

薬包紙を開くと、黄土色の丸薬が現れた。ウサギの糞ほどの大きさがあある。

形も少しいびつだし、手作り風の丸薬だ。マネジャーの濱口から話を聞いてなければ、とても呑み込む勇気がなかっただろう。

少女が冷蔵庫から出してきたミネラルウォーターで、瀬名はそれを胃の中に流し込んだ。その様子を、少女はじつと見つめていた。

「本当に高校生なの？」

ついそう訊いてしまった後で、まるでオヤジの台詞だと気づき、自分でも恥ずかしくなった。ごまかすために、少女が返事をする前にこう付け加えた。

「いや、髪を染めてなくて、まともな喋り方をする高校生を、久しぶりに見たもんだからさ」

「私が高校生だって言うと、長谷川さん、困るんじゃないですか？後で、高校生だとは知らなかったって言えなくなるし」

「じゃあ訊かない。で、このグループは君の他に何人いるの？」

「何人いるかは秘密です。でも、多くはいません」

「みんな君みたいな子なのかな。つまり……」

「髪を染めてなくて、『まともに』喋るってことですか？ そう言えば、みんな髪は染めていませんね」

「そういう厳しい学校なの？」

「いえ、クラスには染めている子のほうがずっと多いけれど……あ！」

のせられて、本物の高校生だということを書いてしまったことに気づき、少女は片手で軽く口を押さえた。



そんな仕草さえもが、わざとらしくなく、新鮮だった。

瀬名は、思わず勃起している自分に気づいた。

勃起……これほど固くそそり立ったのはいつ以来だろうか。

瀬名はまだ二十八歳だが、過労と女たちへの失望で、このころずっと不能気味だった。

どんな女を前にしても、できないことのほうが多い。できたとしても、以前のような征服感や充足感が味わえない。ペニスは辛うじて挿入が可能な程度の堅さにしかならなかったし、射精のときも、放出するというよりは、漏れ出るといった感覚に近かった。

そう。濱口の話で瀬名が興味を持ったのは、美少女云々よりも、むしろ驚異的な回春薬「フゲン<sup>ベータ</sup>」を入手できるということのほうだった。

本当にさつき飲んだ薬のせいなのか？ まだ数分しか経っていないのに。

しかも、股間のものだけではなく、身体全体が変化してきている。ここ数日、三、四時間しか寝られず、疲れきっていたにもかかわらず、身体中の血液が加速しながらめぐり始めた感じだ。適度な運動の後のように、筋肉に弾力が増した気もする。かといって、息苦しかったり動悸が激しくなるわけではない。小学生の頃、給食を呑み込むように食べて、遊び場を確保するために校庭に飛び出していったときのような、無邪気で抑えようのない活力が蘇ってきた気分だった。

その見えないエネルギーを少し抜き取るように、瀬名はふうつと軽く息を吐いた。

下半身の緊張は、もはや痛みを伴うほどにまで高まってきている。

「すごいな。この薬」

瀬名はテーブルの上に残っていた一包をつまみ上げて言った。

「もう効いてきましたか？ やっぱり、お若いから、効くのも早いのかな」

少女がちょっと誇らしそうな笑みを浮かべた。

女がいくときつて、こういうことやったんかと思いましたわ。いや、あれはきつと、女が行くときより百倍いいんと違うかな

濱口が漏らした言葉を思い出す。

半信半疑だったが、これなら期待できる。

今や、瀬名の下半身は、自分の肉体の一部とは思えないほど勝手に硬直し、萎える兆しなどみじんもなかった。

立ち上がり、シータと名乗った少女に近づく。スーツのボタンを外し、そのまま脱がせた。シータは何も言わず、されるがままになっていた。

夏物のスーツの下は、ごくシンプルな白いブラウスだった。すぐ裸にさせるのは惜しいような気がして、両肩に手を掛けた。

少女の肩の丸みは、瀬名の両掌の中にすっぽりと収まった。名人が設計した家具の一部に触れるような感触をしばらく楽しんでから、右手を背中に回した。

薄い木綿の布地越しに、肌の弾力が伝わってくる。

たまらず、強く抱き寄せた。

背中まで届く少女の黒髪が揺れ、瀬名の頬を撫でた。そのくすぐったさに、胸の奥のほうから熱いものがこみ上げ、思わず吐息が漏れた。

自分の身体が初つひな反応を示していることに、瀬名は改めて驚いた。

女の身体に初めて触れたときのような歓喜。そうした感動は、過去……いや、前世に置き忘れてきたつもりだったのに。

これもフゲン という薬のせいなのか？

瀬名はさらに力を込めて少女の身体を抱きしめた。

「痛い……」

「あ、ごめん」

「すごい力。乱暴なのは嫌いです」

「そんなつもりじゃないんだ。つい興奮してさ。ごめん」

照れ隠しのように、少女を軽く押してベッドの上に横たわらせた。

覆い被さるようにしてブラウスのボタンを外すうちに、瀨名の頭の中は完全にトリップ状態になっていった。

指先が少女の身体に触れるだけで、そこから未知のエネルギーが注入されるような感覚。まるで全身が性感帯になって、これから頂点へ登りつめていくための準備を始めているかのようだ。

単に勃起を促すだけの薬だと思っていたが、フゲン は精神の高揚ももたらすらしい。

しかし、そんなことを考える力さえ急速に失われ、ただ、全身を、波打つような至福感に委ねていくことだけしかできなくなつた。

理屈はいい。今は、この満ちてくる至福のうねりを逃したくない。

ブラウスのボタンが瀨名の手によってすべて外されると、少女は一度上半身を起こして、自ら両腕を袖から抜いた。

パッドの薄い、ごくシンプルなブラからは、思ったよりも谷間の深い乳房がのぞいている。

瀨名はブラをつけたままの白い乳房に唇をあてた。

子供のときに飼っていたウサギに似た匂いが、かすかに鼻腔をくすぐった。学校から帰つてくると、まっ先にウサギを抱き上げ、柔らかな体毛で被われた暖かい肉塊に鼻を押しあて、匂いを嗅いだものだ。

ピョンキチと名付けたそのウサギは、かすかに若草の匂いがし

た。学校で嫌なことがあったときも、あの匂いを嗅ぐと、不思議に気持ちが楽になった。

いつまでも乳房に顔を押しあてている瀬名の頭を、少女は、赤ん坊を寝かしつかせる母親のような仕草で、そつと撫でた。

瀬名の全身が軽く痙攣し始める。

どうしたというのだろう。髪をそつと撫でられただけなのに、身体中に快感が走り抜ける。髪の毛の一本一本までもが性感帯になつてしまったかのようだ。

あまりの気持ちよさに、恐怖感さえ覚えた。

このままこの快感が増大していったら、最後は神経が快感を受けとめきれずに死んでしまうのではないか？

しかし、そんな懸念さえ消し飛ぶほどに、快感は直線的に増大していった。どこまでいくのか。快感という概念さえも超える、まったく未知の感覚に突入していく。

これは……いつもの自分の身体ではない。何かまったく違うものになつている。すべての細胞が裏返つてしまったかのような感覚。

理性が宿る余裕がないほどの性感の集合体。何も制御できない。何も考えられない。

いや、考える必要などない。コントロールする必要もない。

人間は、この快感を得るために生まれてきたのかもしれない。どんなセックスでも満たされなかった、快感の最後の隙間。その先に何かがありそうदैいて、結局は得られなかったもの——それが今、身体中を突き抜けている。粘膜レベルの快感の先には、こんなとてつもないものがあつたのか……。

目を開けているはずなのに、見えている世界が違う。皺のよつたシート、少女の身体……網膜に結んだ像は現実のものなのに、いつもの視覚とは違う。身体の外に景色があるのではなく、身体

が消え、景色と一体化しているような浮揚感。

肌が接触している感覚も、まったく違う。少女の肌と触れていることで、存在が溶け合い、確実な安堵に変わっていく。

そう、これは肉体の快感などではない。存在そのものに対する快感だ。自分が存在していることの喜びが、精神や肉体の壁を飛び越え、新しい小宇宙の中で踊っている。

瀬名はうめき声を上げながら、少女の、白く柔らかな身体にすがりついていった。

よく晴れた午後だった。

藤堂景康はひとり、施設の敷地の片隅にある物置小屋の前に佇んでいた。

七十八になっても、どこかといって悪いところはない。さすがに歯は一部入れ歯になったが、それでも、自分よりもっと若くても総入れ歯にしている連中がいることを思えば、本物の歯が半分以上残っているのは自慢してもいいくらいだ。

嘘！ 藤堂さん、そんな……

薄気味悪いものを見るような目で、あの女はそう言った。

困りましたね。じゃあ、手でしますから

ふざけるな。俺は汚物か？ 寝たきりの連中のおむつを替えるのと同じように、俺の甦った逸物を「処理」するといふのか？

怒りと虚無感が同時にこみ上げてきた。

あれが最後の一錠だったのに。

ただ受け入れてくれるだけでよかったのに。

もう少しで、七十八年の人生において初めての快感に到達できたかもしれないのに。

予感は十分にあった。

あの薬を試すのは三回目だった。

最初の一錠は、自分の部屋でこっそり飲んでみた。

一体どんな効果があるのか、まったく分からないまま、怪しげな薬を飲むのは多少の勇気が必要だったが、すぐに開き直れた。

この薬が原因で死んだところで、別にどうということはない。

これから先、死ぬまでにどれだけの時間が残されているのかは分からないが、期待できるようなことは何もない。感動もないまま、生物的に生きながらえることにどれだけの意味があるだろう。

どんな効果があるのか、いや、多分なんの効果もないだろうが、怪しげな薬を飲むということでも多少の好奇心が満たされる。それだけでも儲けものだった。

ところが、その薬の効果はとてつもないものだった。

弾力を失った肉体が、突然何か別のものに変わった。

若い頃は、人間誰でも、病気や怪我をしていない限り、肉体の存在を意識することはあまりない。それが、歳を取るにつれ、特に何もなくても、身体の不自由さ、限界を意識することが増えていく。

中年以降、朝、目が覚めるたびに、自分の身体を重荷と感じ続けてきた。どこかが痛む、力が入らない、すぐに疲れる……そうした感覚とずっとつき合ってきた。

その忌まわしい肉体が消滅し、自分の意識が別の何かとして再生したような感覚。

肉体は確かに存在しているのに、精神は肉体に縛られていない。酒や薬物による一時的な解放感や浮遊感ともまったく違う。

すべての細胞が輝き出すような歓喜の中、藤堂は夢うつつのひとときを過ごした。

元の状態に戻ったとき、彼は自分がいかにもつたいないことを

してしまったのかを思い知り、後悔した。

短い時間とはいえ、衰えた肉体の呪縛から解放されたのだ。それなのに、何もしなかった。なんと愚かなことか。

二錠目を飲むまで、数日かけて考えた。

何か足りない。この薬は、一人で飲んではいけないのだ。

かつて体験したことのない快感が押し寄せる中、心は、何かとつながろうともがいていた。

肌を合わせ、存在を融合させる相手が必要なのだ。誰かと抱き合いながら、あの快感を迎えられたらどんなに素晴らしいことか。相手がいれば、きつと、到達できなかつた未知の快感への扉が開けるに違いない。

数日後、藤堂は二錠目を飲んでから、大伴公子きみこの部屋を訪ねた。公子は彼より十歳年下の六十八歳。老人ホームの中では最も若い入居者だった。

文房具メーカーの重役未亡人。何不自由なく暮らしてきたのだろうが、家族の愛にだけは恵まれなかつたらしい。子供の話題になると決まって顔を曇らせ、話をそらせるのが常だった。

色白で上品な顔立ち。ホームの中では、男性入所者の人気を一身に集めていた。

藤堂もまた、公子の存在をいつも気にしていた。

特に仲がいいというわけではないが、話しかければいつも笑顔で応じてくれたし、自分のことを嫌いではないという確信はあった。

その夜、二錠目を飲み、藤堂は公子の部屋を訪ねた。

ドアの前で、いつもとは違う気配を感じた。しかし、彼の身体も変化を見せ始めていたところだったし、軽くノックをしてから、思い切ってドアを開けた。

細長い部屋の奥に、ベッドがある。

顔だけをこちらに向けて、公子は驚いた目で彼を見つめた。彼女は全裸だった。

薄明かりの下、皺が刻まれた肉体が横たわっている。

そしてその上には、やはり全裸の男が覆い被さっていた。

源治郎……彼よりも三歳年上。八十歳を超えた老人だった。

しまりのない臀部をこちらに向け、源治郎は一心不乱に公子の肉体に挑んでいた。

そして、藤堂は見てしまった。

源治郎の股間に、そこだけ見違えたように堅くそそり立つ陰茎を。

藤堂は黙ってドアを閉め、自分の部屋に戻った。

そうだった。あの薬を持っているのは自分だけではなかったのだ。源治郎もあの快楽を知った一人だったか……。

それからの小一時間は、思い出したくもない。

肉体の歓喜が勝手に訪れ、空しく通り過ぎていった。

こんなことなら、公子の部屋を訪れる前に飲むのではなかったと後悔したが、遅かった。

そしてとうとう最後の一錠になった。

かけがえのないその一錠を試みる相手として、藤堂は田辺亮子を選んだ。介護スタッフとしてホームに常駐している女性の中ではいちばん若い。

整ってはいいるが、彫りが浅く、幸福を逃す貧相な顔だち。色が白いのは取り柄だが、栄養が足りないのか、自律神経失調障害があるのか、冷え性で、いつも人より一枚余計に服を着ている。

噂では、看護婦をしているときに男に騙され、借金を抱えて逃げるようにこの地へやってきたらしい。

正直なところ、藤堂の好みではない。しかし、ホームの中でいちばん若く、美しい女性であることは間違いなかった。



そうだ。最初から悩むことはなかったのだ。最高のひとときを手に入れるためなのだから、求められる最高の相手を選べばいいのだ。

しかも、亮子の仕事は老人たちの介護だ。先の長くない人間の、一生に一度の願いを叶えるのは職務ではないか。

ただ、受け入れてくれればいい。黙って抱かれてくれればいい。小遣いくらいはやるつもりだった。いや、それであの快樂の向こう側にまで行き着けるなら、遺産の相続者に指定してもいいと思っただ。

それなのに……。

気がつくと、物置小屋の扉を開けて中に入っていた。なぜだろう。視界が青い。

セメントの袋、スコップ、芝刈り機、鍬……それらが、まるで青い蛍光灯に照らされているかのように見える。

藤堂は静かに息を吐き、しばらくそこに立ちつくした。

なぜ、自分はいまここにいるのだろうか？

一瞬、理性がそう自問した。

あの快樂を求める気持ち、自分をここに導いてきた。そんな気がする。

意識とは無関係に、身体が動いている。

ただ、この先にある快樂は、あるとき味わった喜悅とは少し違う種類のものだという予感がする。

何も考えず、あとは寝るだけ。

悩みも、苦しみも、すべては解決された後に、眠りにつくときの安堵感……。

あの薬を飲んで得られた快樂が、性感の極致だとすれば、これから手に入れる快樂は、安らぎの終点だろうか。

きつとそうだ。悩んでいるのは、肉体に縛られているからなのだ。あらゆるしがらみや限界から解き放たれ、本当の存在に戻る 때가来た。

究極の悦楽があるのと同じように、究極の安らぎもある。あの体験が、そう確信させてくれた。

藤堂は顔を上げた。

視界はますます青く変わっていたが、周囲の様子はきちんと見えている。

小屋のいちばん奥に、目当ての電動工具があった。

小型の電動チェーンソー。エンジン式のチェーンソーに比べるとずっと軽いので、老人にも簡単に持つことができた。

ケーブルを解き、小屋の隅にあるコンセントにソケットを差し込む。

先週、用務員がこれで桜の木の枝を切っていたのを、彼はじつと見ていた。桜を切る馬鹿がいるかと言いたかったが、黙っていた。

どのくらいの太さの枝がどの程度に切断できるのか、観察していたのだ。

小さくても、チェーンソーの威力は抜群だった。

力士の腕ほどもある枝が、いとも簡単に切断された。

これなら失敗はありえない。

藤堂はほくそ笑んだ。

スイッチを入れる。

轟音とともに、チェーンソーは回転し始めた。支える彼の腕に、軽いショックが伝わる。

藤堂はチェーンソーを肩の上まで持ち上げると、一気に自分の首筋へ落とすように押しつけた。

新宿歌舞伎町の一角に、間口一間半ほどの小さな漢方薬局がある。店の名前は六砂堂<sup>ろくさどう</sup>。

自動ドアもなく、客は、半間<sup>はんげん</sup>しか開いていない木製の引き戸の間を通らないと中に入れない。一見<sup>いちげん</sup>の客には、かなり敷居が高く感じられるだろう。

少し離れたところには大型ドラッグストアがあり、漢方薬も置いてあるから、普通の市販薬を買う客はそちらに入る。そのせいもあるが、繁華街の一角にありながら、店の中に客の姿が見えることは多くなかった。

壁際には様々な和漢薬の材料が入った瓶が並べられている。もちろんメーカーが出している市販薬も並んでいるが、店としては、客の相談に乗り、個別の調合をすることに力を入れていた。

その六砂堂の入口を、何の躊躇いもなく、小柄な中年男性がくぐった。

「例のやつ、まだ入ってこない？」

男性は、レジそばにいた若い店員に、いきなりそう声をかけた。

「いらつしやいませ」

守安<sup>まもやす</sup>創司<sup>そうじ</sup>は、伝票をチェックしていた手を止めて顔を上げた。

「ああ、あんたじゃない。……まあ、いいか。フゲン<sup>アルファ</sup>の予約をしている者だけねど。鈴木っていう……」

またあの薬の話か……。

「申し訳ございません。フゲン は入荷のめどがまったくたってありません」

創司は、うんざりする気持ちが顔に出ないよう努めながら答えた。

「そう……。やっぱりね。それで……」

客はすぐには帰らなかつた。

「他に何かご入り用なものがございますか？」

「いやね……なんていうか、君じゃなくて、もう一人の店員さんのほうがいいんだけど……」

「宇川うがわですか。すみません、宇川は今、ちょっと外しておりますが、六時には戻りますが」

「ああ、そう……」

客は、高価そうな腕時計に目を落とした。時刻は五時を少し回ったところだった。

「お薬のことでしたら、私が承りますが」

内心、さっさと帰れと思いつつも、職務上、創司はそう答えた。

「うん……いやね。フゲンフゲンのこと。もしかして取り次いでくれるんじゃないかと思って」

「？ ああ、あれはまったくのデマですよ」

「本当？ まあ、いいや……また寄ってみるから」

客は薄笑いを浮かべると、何も買わずに帰っていった。

男の少し丸まった背中を見送ると、創司は軽いため息をついた。このところ、こんな客が多い。

フゲン という薬が話題になり始めたのは数か月前のことだ。

惹麟堂しゅりんどうという、名もないメーカーが売りだした商品だが、回春効果があると評判になり、飛ぶように売れた。

しかし、フゲンは医薬品ではない。ラベルに表示された品名は「ニンニク加工食品」となっている。

成分表示にも、これといって特別なものは書かれていない。ニンニクエキス、牡蠣殻粉末、白子抽出物、マムシエキス、デキストリン、ローヤルゼリー……。その程度の「健康食品」は世にまた存在するが、フゲンの定価は異常に高く設定されていた。

三十錠入りで二万八千円。一錠千円弱だ。普通に考えれば、詐欺

に近い。それでも売れ続けたということは、他の健康食品の類とは一線を画すような確かな「効能」があったのだらう。

しかし、量産ができないらしく、たちまち品薄になり、裏で闇レートによる売買が行われるようになった。インターネットには「フゲン 売ります」というホームページも数多く現れた。

さらには、一部で怪しげな噂が飛び交うようになった。

フゲン には、一般には売られていない「フゲン」という特別版があり、その効果はフゲンの比ではないというのだ。

この噂には様々なバリエーションがあった。基本形は「暴力団が買い占めて裏ルートで売っている」というもの。

他にも、シテイホテルにしか出張しない高級売春組織が、女と込みで幹旋しているとか、新宿歌舞伎町に中国人風の売人が出没するとか、巣鴨にある大人の玩具屋に入り、合言葉を言うと売ってもらえるなどというもののまで、いろいろある。

中でも、ブラックジャーナリズムを標榜する某雑誌に載った与太記事はかなり傑作だった。

その記事によれば、もともとフゲン には、表示成分以外に、人間の精巣や肝臓などの「隠し原料」が含まれている。隠し原料の工場は北朝鮮にあり、そこから密輸された原料をごく少量ブレンドしたのがフゲン で、北朝鮮からオリジナルなものを直輸入したのがフゲン だというのだが、このへんまでくると、まともに取り合う者はほとんどいなかった。

もちろん、フゲン の発売元である惹麟堂は、すべてまったくのデマだと否定していた。

創司も、もとよりそんな話は信じていない。

入口からの光が一瞬翳ったかと思うと、さっきの客とは頭一つは違う、作務衣さむえを着た大柄な男が音もなく入ってきた。

「お帰りなさい」

「ああ」

入ってきたのは六砂堂の店主・嵯峨野市朗次さかのいちろうじだった。

肩まで伸ばした白髪で老人だと分かるが、背筋はピンと伸びている。

歳は七十を過ぎているが、とてもそうは見えない。肌の艶もよく、肩には筋肉の盛り上がりさえ認められる。

「宇川はまだ来んのか？」

「はい。今日は六時からです」

「いや、話があるから早めに出てこいと言ってあるんだが」

嵯峨野は一旦店の奥に消えると、白衣に着替えてカウンターの中に入ってきた。

白衣の下は素肌だ。赤黒く光沢のある胸が覗いている。

嵯峨野市朗次は、鍼治療はりや生薬調合の達人で、その世界では伝説の人物だった。

一口に達人と言うが、鍼も生薬調合も、奥の深い世界である。一方だけでも、究めるのは容易なことではない。どちらにも精通した上で、しかも達人と呼ばれるということは、普通にはとても考えられないことだった。

ただし、嵯峨野自身は、その実力を積極的にアピールはしていなかった。人嫌いで、店に出ている、客に愛想笑いでできないどころか、気に入らないと追い返してしまうことさえある。

それでも店がつぶれないのは、彼の腕の確かさを知る固定客がいるからだ。店の二階を使って、ひっそりと鍼治療をしているが、常連の中には相当な金持ちもいて、そうした患者からは高い診療費を取る。高いのではないかなどと少しでも文句を言おうものなら、二度と治療には応じない。

創司は、そんな偏屈な嵯峨野になぜか気に入られている、たっ

た一人の直弟子だった。

「宇川はクビにする」

嵯峨野はぶつきらぼうにそう言うと、突然、店の帳簿をポンと創司の前に投げてよこした。

予測できない事態ではなかった。

宇川は店の経理面をほとんど任されていたが、最近、創司も、不明朗な金の動きや仕入れ帳簿の改竄に気づき始めていた。

「使い込みですか？」

「そんなところだ。それもせせこせことやりおって。わしも前から変だとは思っていたが、あまりにやり口がせこいんで、見逃していたんだ。売上金をかすめるといいうなら分かりやすいんだが、店とは別に、勝手に汚ねえ商売をしていた」

「商品を横流ししたんですか？」

「そうだ。フゲンとかいうインチキ臭え薬を、どうしても欲しいという客に、滅茶苦茶な金額で売りさばっていた」

創司はさつき店を訪ねてきた客の、意味ありげな顔を思い出した。

嵯峨野は、メーカー製の市販薬販売にはほとんど関心がなかった。仕入れなども、一応は目を通すものの、宇川に任せきりだった。

「市販薬など、どれも似たようなものだ」というのが嵯峨野の口癖だった。

「生薬の醍醐味ってのはな、一人一人の体質に合わせた調合にあるんだ。同じ処方でも、微妙な配合比率によって効き方が違ってくる。出来合いの薬を売っているだけじゃあ、本物の薬屋とは言えん」

そうした口上を、創司は嵯峨野から何度も聞かされ続けてきた。創司もまた、店での販売業務にはあまり関わっていなかった。

宇川が店を抜けているときに交代することはあるが、時間的には長くない。

「すみません。もっと早く気づいていればよかったです」

「馬鹿野郎。おまえにはそんな細々こまこまとしたことは期待しておらん」  
嵯峨野は不機嫌そうに言った。

そのとき、創司の腰にぶら下げている携帯電話が振動し、着信を知らせた。

嵯峨野の顔を一瞥してから、電話に出た。

創司くん？ 私、ミナコ。ベルベットのミナコ。今、空いてない？ 背中が痛くてたまらないの……

私用電話ではない。六砂堂の常連客でもあるソープ嬢からの出張マツサージ依頼だ。

……七時半に予約のお客さんが入っていて、それまで一時間半くらい空いてるから、その間にお願いできると嬉しいんだけどすみません。今、店を空けられなくて……

「行ってこい」

創司が断る前に、電話の内容を察知した嵯峨野が、遮るようにそう言った。

「店はわしがおるから大丈夫だ」

「分かりました。今から行きます」

創司は、嵯峨野の顔を見ながら、電話の向こうのミナコに答えた。

「ついでに飯も食ってこい。伝授は九時からだ」

「はい」

こんなふうに、風俗店で働く女たちから出張診療を頼まれることがよくある。これは嵯峨野も公認の「修行」のひとつだった。

嵯峨野は、金を取らない限り、創司が他人の診療をすることを認めていた。いや、むしろ積極的に勧めていた。生きた人間をど



れだけ相手にしたかによって、技は高まっていくからだ。

風俗嬢の場合、仕事中は店から離れることはできないので、店が暇な時を見計らって、出張診療を依頼してくる。

嵯峨野はほとんど出張診療をしない。それに風俗嬢からは高額  
の診療費を取るの、女たちはもっぱら弟子の創司に出張診療を  
頼んでくる。嵯峨野から渡されている携帯電話は、主にその受け  
付けと、創司が店から離れているときのための連絡用に使われて  
いた。

店を一步出ると、そこは日本でも有数の歓楽街・新宿歌舞伎町。  
風俗店のまがまがしい看板が林立する路地を抜けていく間に、ポ  
ン引きに声をかけられることもよくある。

足早に歩いていると、人混みを縫うように、前方から若い女が  
一人で歩いてくるのが目に留まった。

シャギーカットの髪が肩の上で軽そうに揺れている。

服装は、地味な半袖のシャツブラウスに、膝頭くらいまでのス  
カート。肩から布製のシヨルダーバッグを提げている。

互いの距離が縮まるにつれ、創司の目はその女に釘付けになっ  
た。近くで見ると、思ったよりずっと若く、まだ高校生のように  
も見える。

化粧つきの顔は、知性と意志の力だけで十分に美しい。何  
かに怒っているようにも見える鋭い眼差しが、周囲の猥雑な風景  
を拒絶するかのよう、行く手をきつと見つめていた。

すれ違った後も、創司は歩を止めて彼女の姿を目で追っていた。  
すると、エスニックファッションマジ・麗裸<sup>レイラ</sup> という看  
板が出ている小さな雑居ビルに入っていた。

あんな子が性風俗の店で働いているのか。

軽くため息が出た。

この町で働いていると、たいていのことには驚かない。若い女が一人で歩いている場合、かなりの確率で、性風俗の店で働く子である。その中には、一見して清純そうな美人もかなり混じっている。

場所柄、六砂堂にもそういう女性たちが客としてやってくる。一日中、日の当たらない、決して衛生的とは言えない部屋で裸で働く彼女たちは、様々な健康障害に悩んでいる。生理不順、冷え性、腰痛、皮膚炎、不眠症、不安神経症……。西洋医学に不信感を持つてというよりは、噂を頼りに、漢方薬や鍼治療の門を叩く女性は少なくない。

それにしても、今、ビルに消えた少女は、創司が日頃から接している風俗店で働く女性たちとはかなり違う雰囲気を持っていた。そのとき、見覚えのある痩せた男が、少女が消えた雑居ビルの中に、後を追うように入っていた。

宇川だった。せせこせことごまかした売り上げ金で、性風俗店で遊ぼうというのだろうか。

創司は、嵯峨野が店で待っていることを彼に告げるため、店の入口に近づいた。

麗裸<sup>レイラ</sup> という風俗店の看板は一階のもので、すぐ横に二階への階段があった。二階の店はつぶれて空室になっているらしく、狭い階段室にはゴミと化した電飾看板が放置されていた。そこで、宇川は、さっきの少女と何やら話をしていた。

宇川は小さな紙片のようなものを少女に渡し、それと引き替えに、少女は茶封筒を宇川に渡した。中身は金に違いない。少女が宇川から何かを買ったとしか見えなかった。

そこまで見届けると、創司は店から離れた。

すぐに二人が出てきて、宇川は六砂堂のほうへ、少女は元来た道に戻っていった。

バランスのとれた若い身体が、倦怠感に満ちた人混みを切り裂くように進み、すぐに見えなくなった。

何か、不思議なものを見てしまった気分で、創司はしばらく少女が消えた方向を見つめていた。

ミナコのマッサージに遅れてしまうので、創司はそのままベルベットに向かった。後は嵯峨野に任せておけばいい。

しかし、宇川は彼女に何を売ったのだろう。一瞬しか見えなかったが、ただの紙片のようだった。薬などではない。しかも、宇川と少女は初対面ではなさそうだった。なぜか妙に引つかかるものを感じた。

ベルベットは、西武新宿駅からコマ劇場方面に斜めに抜けていく路地に面した雑居ビルの中にある。

七階建てのビルの、四階以上が全部この店で占められている。歌舞伎町随一の高級店で、女の子の質にも定評があった。

女の子たちの控え室が狭いので、部屋が空いているときは、店長の了承を得て、個室でマッサージをする。ソープ嬢と客の役割がほぼ逆転するわけだ。

エレベーターで四階の受付まで登ると、カウンターの中にいた店長に目配せした。

「いらつしやい。こちらへどうぞ」

一般客の手前、店長の言葉遣いはていねいだ。そのまま直接従業員控え室に案内される。

従業員控え室では、ミナコが待ちかねていた。

「七時半には客が入るの。慌ただしくてごめんなさいね。もう背中がパンパンで、吐いちゃいそう」

そう言いながら、ミナコは店長のほうに意味ありげな視線を送った。

「終わったら私もお願いできないかしら？」

隣にいたリリーが甘えた声を出した。

「リリーさんは今お客さん入ります」

店長がすかさず釘を刺す。

高級店だから、客がつくと二時間は抜けられない。

リリーは残念そうに口元を歪めた。

店にとって、創司は複雑な存在だった。

創司の出張診療で、体調不良を訴えていた女の子が嘘のように回復する。結果的には女の子の病欠率が減り、サービスも向上するから、その点では店にとってもプラスになる。それが分かり、この店では営業時間中であっても、予約客がない限り、創司の出張診療を黙認してくれている。しかし、けじめをしつかりつけなければ、従業員の統制が乱れる原因にもなる。

ミナコの後について、創司は個室に入った。いつもの七階の奥。高級店の割にはあまり広くはないが、その分、調度品などは凝っている。バスタブは人工大理石で、フランス製だそうだ。

ミナコは少し日本人離れた彫りの深い顔立ちで、虹彩の色が薄い。最初はカラーコンタクトを入れているのかと思ったが、そうではなかった。生まれつき、少し青みがかっているのだ。肌の色も白いし、訊いたことはないが、白人の血が混じっているのかもしれない。

「じゃあ、まず舌を出して」

と創司が言い終わる前に、ミナコはペロツと舌を出した。

舌の様子で健康状態がある程度は分かる。

苔状の白い部分が増えていて、少し荒れていた。

次に、創司はミナコの首筋に軽く手を当てる。

熱はないし、リンパ節も特に腫れてはいなかった。

チヨゴリのような服の前をたくし上げて、ミナコの腹部を露出

させると、ミナコはもどかしそうにそのまま服を脱いで、キャミソール姿になり、そしてさらにキャミソールも脱ぎ、ブラとTバツクのショーツだけになった。

この前診たときより、少し贅肉がついた感じた。

仕事柄、若い女の裸は毎日のように目にしているのだが、本当に美しいと思える身体はそう多くはない。形として整っていても、若さを感じられない、不健康な肉体も多い。

「じゃあ、ブラも取って仰向けになってください」

「はい」

ミナコは素直にブラを外すと、ベッドの上に仰向けになった。柔らかい乳房は、寝てしまうと美しい形が崩れるのが惜しい。診療に集中しようとする創司の心が少し乱れる。

白い腹部に手を当て、次に耳を当てて腸の動きを探った。

「便秘気味でしょうか？」

「よく分かるわねー。さすが名人」

「よしてくださいよ。名人は師匠のほうで、俺はまだまだ修行中の身です」

「でも、私は嵯峨野のじいちゃんより、創ちゃんのほうが相性がいいの。じいちゃん、うまいかもしれないけれど、なんか雰囲気怖いんだもん。触られると、ちょっと身体が固くなっちゃう。リラククスできないんじゃないじゃ、マッサージにならないものね」

「そうですか……」

背中が凝っていても、まずは身体の正面から診ていくというのが創司の流儀だった。いや、創司の、というよりは、師匠の嵯峨野のやり方だ。

首の横から鎖骨の上、柔らかいために両脇に向いてしまった乳房の横……と、ゆっくり指先で触れていく。

マッサージしていくというよりは、体内の「気」を探っていく

のだ。

短時間で凝りをほぐすには、物理的なマッサージよりも、「気」をうまく動かしてやるほうが効果的だ。

一日に何人も客と肌を合わせる風俗嬢の場合、肉体的な疲労からくる凝りに加えて、客から「邪気」を吸い取ってしまうことがよくある。

多くの客は、単純な性欲のはけ口というだけでなく、様々なストレスや不安、劣等感、満たされぬ想いを癒されようと風俗店にやってくる。無意識のうちに、精液と一緒に精神の汚れを放出したいと願っているのだ。

だから、気持ちの優しい風俗嬢ほど、そうした客の「邪気」を吸い取ってしまう。客から吸い取った邪気は、彼女たちの体内に澱おじのようにたまっていく。

ベッドの上に仰向けになったミナコを見下ろすと、白い肌の向こう側に、澱みきった「気」が見える。ミナコの場合は、大体いつも、中極と呼ばれる、恥骨の上約二センチあたりにあるつぼに邪気がたまる傾向がある。

今回もそうだった。

他にも、乳房の裏側あたりに澱よじみがありそうだった。創司は、触れるか触れないかくらいの距離を置いて両乳房の上に掌をかざし、自分の気を送り込んだ。

澱んだ邪気を少しずつ動かすように、そつとマッサージするにつれ、ミナコの柔らかい乳房が、創司の掌の中で独立した生き物のように呼吸し始める。

はあーっと、ミナコは吐息を漏らす。その吐息と一緒に、体内にたまった邪気が少し外に排出される。

「しつこく乳房にしゃぶりついてきた客がいませんでしたか？」  
「そうなのよー。昨日のお客さんに、最初から最後までおっぱい

にこだわる変な人がいたのよね。四十くらいかな。頭つるつるに剃っててね。作家だつて言つてたけど、本当かな。揉むとか吸うとかじゃなくて、頬とか頭とかをすりつけてくるだけなの。それだけで五分も十分も。最後はなんか気持ち悪くなっちゃって……。でも、そんなことまで分かるの？」

「いつもより乳房に疲れがたまっているようですから」  
創司は敢えて「気」という言葉を避けて「疲れ」や「凝り」と言う。妙にオカルトじみで受け取られたくないからだった。

信用されないからではない。むしろ逆で、風俗嬢や水商売の女性たちは、人一倍、この手の話に乗りやすいところがある。

仙道、風水、気功……そのへんの知識をいい加減に切り売りし、インチキ商品を高く売りつける連中も多い。健康の不安につけ込むカルト宗教もある。そうした商売とは一線を画しておきたいという気持ちがあった。

乳房から下へ少しずつ移動し、股間にたまつた邪気を動かそうと、さらに強く気を送る。

指先は腰から股上のあたりを軽くマッサージしているが、物理的な力で血行をよくするのではなく、指先から気を送り込み、ミナコの体内に澱んでいる邪気を動かす。

U字溝にたまつた汚物が雨で押し出されるように、邪気が動き始めるのが分かった。こうなればもう一息だ。

「じゃあ、うつ伏せになってください」  
ミナコは黙つて身体を反転させる。すでに表情は恍惚としている。

首の後ろから背中の上部にかけて、前よりも脂肪が付いていた。この脂肪もくせ者で、風俗嬢の場合、不規則な生活やストレス発散のための暴飲暴食が原因で太ることが多い。自然に年輪を加えた身体の丸みは年相応の色気にもつながるが、風俗嬢が少しずつ

ためていく脂肪には邪気が宿りやすい。

上腕部を揉み、背骨の両側を下に向かってマッサージしていく。指圧のように強くは押さない。指圧で効果を上げるには時間が足りないからだ。

背中側にたまった邪気をもみほぐすようにイメージしながら、指は腰のほうへと下りていく。

ミナコが軽く鼻を鳴らした。すっかり身体がリラックスしている。

この瞬間にも、邪気は鼻の穴を通って外へ排出されているはずだ。

Tバックのショーツは、後ろから見れば、履いていないも同然だった。

その光景に惑わされず、尻の中心部を軽く指圧する。

次に掌で円を描くようにもみほぐしながら、やはり邪気を動かすようイメージする。

仰向けになっていたときに動かした邪気の塊が、股間のほうに下りてきている。背中側から集めて押し下げてきた邪気と合体させ、ひとつの大きな邪気の塊にまとめたところで、最後の作業に入る。

Tバックのストリングスの間から、かすかに左の中指を滑り込ませる。しかし、軽く触れるだけで、決してそれ以上は挿入しない。

出口はこちらだと言いつき聞かせるように、指先に気を込め、ミナコの股間にたまった邪気を吸い寄せる。

「あ……あう……」

眉間に小皺を寄せて、ミナコはため息を漏らす。

その瞬間、膣口から、煙が吸い出されるように、邪気の塊が出てきた。



これが「見える」ようになるまで、五年の修行を要したわけだが、嵯峨野に言わせれば、五年で邪気が見えるようになる者などいないそうだ。達人と呼ばれる嵯峨野ですら、十年以上かかったという。つまり、創司には嵯峨野以上の才能があるらしい。

問題はこの瞬間だった。

ミナコの体内から抜け出した邪気を自分の身体が吸い取ってしまわないよう、全身の「正気」を結集させ、跳ね返す。これを嵯峨野は「気を張る」と表現する。

気の張り方が中途半端だと、ミナコの身体は楽になっても、抜けた邪気が創司の体内に入り込み、今度は創司自身が体調を崩してしまうことになりかねない。

修行の初期段階では、何度もこれにやられ、寝込んだものだ。

ミナコの体内にたまっていた邪気は、いつになく強く、しつこかったが、幸い、うまく跳ね返し、部屋の中の空気に逃がすことに成功した。

邪気は水に溶ける。

創司はそこで慢心せず、空気中に拡散しようとする邪気をバスタブのほうに誘導し、シャワーの水で排水溝に流した。

うまく治療できた安堵感から、思わず軽い吐息が漏れた。

気を張っていた状態から、自分の身体の状態を少しずつ元に戻す。

シャワーから水を流している創司を、半ば放心状態になっているミナコが不思議そうに見つめている。まだ、言葉を発するまで意識が戻っていないようだ。

そのとき、ドアの外を誰かが走っていく気配がした。こういう場所では、走るという行為はそうそうあることではない。

ミナコが不安そうな顔をした。

どこかの部屋で、客が無茶な要求をし、女の子がフロントに助

けを求めたのだろうか。

高級店のほうが、夕チの悪い客は多い。高い金を払っているんだから、どんなリクエストにこたえるのも当然だという顔をする。薬をやっている客が紛れ込むこともある。

嫌な予感は的中した。しばらくすると、ドアがノックされた。

ドアを開けると、店長が真っ青な顔で立っていた。

「血を止められるか？ 隣の部屋で、お客さんが血まみれなんだ」「見てみましょう」

創司はすぐに店長の後に続き、隣の部屋に入った。

入口のそばに、リリーが放心状態でへたりこんでいた。バスロ―ブさえ羽織っていない全裸のままだ。

部屋の奥を見やるなり、創司は思わず息を呑んだ。

奥のベッドの脇に、全裸の中年男が倒れていた。男の周囲だけではなく、部屋中に血飛沫が飛び散っている。一目で、動脈が切れたことが分かった。恐らく即死だろう。

男の右手には、刃渡り十センチほどのナイフが握りしめられていた。血糊をなるべく踏まないようにして近づくと、右耳の下から、まだ血が流れ出していた。

それにしてもよくここまで見事に切れたものだ。切ると言うよりは、耳の下にナイフを突き刺して引き抜いたのだろう。相当の思い切りと「技術」が必要だ。

一応脈を確かめてはみたが、もちろんなかった。

「どうしたんです？」

創司は諦めて、リリーに訊いた。

「どうもこうもないわよ。終わりで、上がり湯の準備をしておちよつと目を離したら、こうなってたのよお……」

リリーはかすれた声で言った。

「自殺ってことですね？」

返事をする代わりに、リリーはしゃくり上げるように首を上下させた。

「冗談じゃないぜ。なんでこんなところで」

店長の声も、興奮と怒りで少しうわずっていた。

「救急車より警察ですね。完全に死んでますから」

創司は冷静に宣告した。

警察の事情聴取などがあり、創司が六砂堂に戻ったのは九時半に近かった。

死んだ男は民放テレビ局のプロデューサーということだった。

リリーの話では、最初から暗い顔つきをしていたが、それでもしつかりやることはやっただらしい。ナイフをしのばせたまま店に入り、セックスをした後、素っ裸のまま自分の首に突き立てたということになる。どう考えても理解できない。

心臓発作で腹上死したり、滑って頭を打って死ぬ客というのはたまにいるが、わざわざソープラントに客として入り、頸動脈を切って自殺する客というのは前代未聞だ。警察でも、この異様な事件の処理に頭を悩ませていた。

可哀想なのはリリーだった。彼女はまだ警察にいる。

どういうサービスをしたのか、どういう体位だったのかということまで、根ほり葉ほり訊かれているはずだ。

六砂堂では、嵯峨野が待ちかねていた。

電話で事情は簡単に話していたが、戻るなり、すぐに何があったのか訊かれた。

最初から、なるべく簡潔に説明した。

嵯峨野は黙って創司の説明を聞いていたが、しばらくして、ぼそりと言った。

「シャブ中毒とも思えんな。死体を見てみたいもんだ」

「血まみれでした」

「馬鹿野郎。そんなことは分かってる」

嵯峨野はそう言うのと、立ち上がった。

「遅くなったが、今夜の『伝授』を始める」

そう言っただけでさっさと二階に上がっていった。

創司もすぐ後に続いた。

「始める」

狭い治療室の中に胡座をかき、嵯峨野は宣言した。

「はい」

創司は姿勢を正した。

「ちようどいい。自殺について話そう。躁の自殺と鬱の自殺についてだ」

嵯峨野はいつもの『伝授』の口調になって、話し始めた。

普段はぶつきらぼうな口調だが、伝授のときだけは、琵琶法師のように一人で滔々と話し続ける。

創司は、嵯峨野の話のリズムを崩さぬよう、ひたすら耳を傾ける。

「自殺は、鬱の病が原因だと思われておる。だが、そうとも言えん。」

鬱は、何かをするエネルギーを生み出さない。だが、自殺をするにはかなりのエネルギーが必要だ。今日、首をかき切った男にしても、単なる鬱病の人間の行為とは思えん。そうだろう？ わざわざ短刀を用意していき、自分で頸動脈の位置に正確に突き刺したんだ。よほどの精神力が必要だ。剃刀くらいではまず頸動脈までは届かんもんだ。切ったと思っても、その上の静脈止まりで、出血はするが、すぐには死ねん。その男は自分の頸動脈の位置と、その切断方法を正確に知っていて実行したことになる」

嵯峨野の伝授はいつになく熱っぽかった。

「いつも言っていることだがな、人間は単なる細胞組織の塊ではない。気が正常に宿ってこそ、初めてまともな精神活動が成り立つ」

その考え方は、創司が長い間、西洋医学に対して抱いていた疑問に対する答えでもあった。だが、今夜はいつもとは違う重みを持った響きを感じる。

「この国全体の気が乱れておるんだ。その乱れが、わしやおまえも巻き込み、波長を合わせるよう囁きかける。

いざというとき、我が身を守るのは自分しかない。他人の身体を診て、治療する技も大切だが、場合によっては、相手の肉体を直接攻撃する技も必要だ。創司。おまえに以前、人間を一撃で殺す技を教えたことがあったな？」

急に話が意外な方向に向かった。

「はい。大針で急所を刺す方法ですね」  
創司は緊張しながら答えた。

大針というのは、普通の針治療に使う針よりもはるかに太くて長い、特殊な針だ。それを頸椎の間に素早く打ち込む殺人技は、テレビドラマの『必殺仕事人』で有名になった方法だが、実際にはあんな風にスマートにはいかない。頸椎の間は特に難しいが、他の急所でも、瞬時にして探り当て、そこに正確に針を打ち込むのは至難の業だ。

しかし、嵯峨野はそうした一種の殺人術なども、ときに創司に「伝授」した。雑談というには熱心すぎるほどの口調で殺人術を語るときの嵯峨野には、一種鬼気迫るものさえ感じられた。

「刃物を隠し持った狂人が、何食わぬ顔でそのへんを歩いている世の中だ。使わぬにこしたことはないが、錆びつかせぬようにしておけ」

「はい」

創司は納得できぬまま、返事をした。

日付が変わろうとする頃、嵯峨野はようやく伝授を終え、家に帰っていった。

店の二階に一人残された創司は、昼間は患者の治療用に使っている煎餅蒲団の上に横たわる。

患者たちが残していった匂いは、每晚少しずつ違う。

特に、性風俗店や飲み屋で働く女性たちが残していった匂いは、独特の邪気を含んでいる。最初の頃は気になってなかなか寝つけなかった。

今ではすっかり慣れてしまったものの、その夜は久々に、蒲団に残された匂いが気になった。

そのときになってようやく、ベルベットに行く前、宇川が少女と怪しげな取引をしている現場を目撃したことを嵯峨野に話しそびれたことに気づいた。

その後遭遇したソープ客の凄絶な自殺事件に比べれば、そんなことはどうでもいいことかもしれない。どっちみち宇川は解雇されたのだから、今さら何をしていても関係ない。しかし、どうも二人が何かを売り買いしていたシーンが気になって仕方がなかった。

思い出そうとしながら、創司は、二人の行為よりも、あの少女の存在そのものが気になっていて自分に気づいた。

今思えば、あの少女は、今までに体験したことのない「気」を発していた。その気の正体を知りたいという気持ちが抑えられないでいる。

この部屋にある唯一の家電品と言ってもいいトランジスタラジオのスイッチを入れると、最近、都会では自殺者が急増している

という話が流れてきた。

千葉県銚子市にある老人ホームでは、ここひと月の間に立て続けに五人ものお年寄りが自殺しました。

また、この春以降、政財界の長老と呼ばれる人たちの自殺も相次いでいます。山岸証券元会長の鈴木徳治郎さん七十七歳。参議院の古参議員で、経済通としても知られていた音山育朗さん七十九歳。戸野川建設取締役の平丘政次郎さん七十四歳。いずれも高齢ではあるものの、病気や仕事上のトラブルなどは見あたらず、周囲の人たちは異口同音に、なぜ自殺しなければいけなかったのかと、首をひねっています。

なぜ理由の見あたらぬ自殺が急増しているのでしょうか？  
アナウンサーが淡々とした口調で語るのを、創司は横になったまま聴いていた。

ラジオを切った後も、しばらくは闇の中で、創司は寝つけないひとときを過ごした。

壁の外は、眠ることのない街・歌舞伎町。

どこかから、また救急車のサイレンが聞こえてきた。

銚子道路をまっすぐ犬吠埼に向かって走ると、やがて一般道になり、犬吠埼入口 という交差点に出る。

特殊車両を示す88ナンバーをつけた黒塗りの大型乗用車は、その交差点をさらに突っ切って行った。

「さつき見えた老人ホームの案内看板には、今の所を右折と書いてあったね」

後部座席右側に座っていた高砂克矢警視は、たかさこかつや 運転する千葉県警の八光警部補に声をかけた。

「いえ、あれは別のホームです。あつちとくようは特別養護老人ホームで

して、市の施設なんです。自殺者が続出したホームは、一昨年できたばかりの新しいホームでして、公費でやってる老人ホームとは違うタイプだそうです。名前もオーシャンヴィラ・ロワイヤル銚子という長い名前です」

八光警部補は、シャツの袖口で額の汗を拭いながら答えた。口癖なのか緊張からか、「でして」がやたらと多い。

「リゾートマンションみたいだな。金持ち相手のやつ？」

「そうですね。私もあまりこっちには来たことがないもんでして、よくは知らないんですが……」

警部補は自信なさそうな声で答えた。

助手席には、もう一人、県警の刑事が座っている。後部座席には高砂の部下である荒木警部もいた。高砂と荒木は警視庁の公安部特殊捜査班という部署から来ていた。県警の刑事たちにしてみれば、やりにくいゲストだった。

車はやがて狭い道に入り、さらに何回か目立たない交差点を曲がって、ようやく目的地に着いた。

海岸からは少し離れているが、高台に位置しているために、太平洋が見渡せる。周りには雑木林と、あまり手入れされていない畑があるだけで、殺風景な場所だった。蝉時雨がかえって寂しさを印象づける。

しかし、できたばかりというだけあって、建物は立派だった。二階建てだが、まさにリゾートホテルのような豪華な外観を誇り、海側に背を向けるようにしてL字型に建っている。

車は誰もいない広場にそのまま入り込み、停車位置を気にすることもなく止められた。

県警の刑事二人の案内で、高砂と荒木は老人ホームの中へと案内された。

理事長室という部屋でしばらく待たされている間、高砂は県警



が用意した報告書を読み返していた。

ファイルの頭には、「銚子老人ホーム連続自殺事件」と記されている。ここひと月の間に、このホームで生活していた五人の老人たちが次々に自殺を遂げたのだ。

首吊り、崖から海への身投げ、果てはチェーンソーで自分の首を切断するなどという派手なものまで、方法はまちまちだった。

老人の自殺自体は珍しいことではない。だが、短期間に五人の自殺は多すぎる。しかも不思議なのは、その五人は、ホームの中でもとびきり社会的で明るく、健康状態にも特に深刻な問題がなかったことだった。

このところ、都内を中心に自殺者が急増している。それも、大会社のオーナーや長老格の政治家など、裕福で名のある人物が多かった。どのケースも、自殺する理由がまったくと言っていいほど見あたらない。

自殺した男性と関係があつたと見られる女性たちも、相前後して自殺、あるいは失踪していた。六十八歳の会社オーナーに囲われていたと噂される三十歳年下の愛人。古参参議院議員の若い女性秘書。あるいは銀行頭取とつき合いがあつたと言われるクラブのホステス。そしてそのホステスがつきあっていた若いホスト……。連鎖反応のように、交友関係に沿って、理由の分からない自殺が相次いでいた。

普通なら公安の特捜班が自殺事件に乗り出すことなどないのだが、これだけ不可解な自殺が続く背後には何か重大な秘密が隠されているのではないかということで、異例とも言える捜査が始まったのだった。

それにしても、千葉の外れにある老人ホームでの連続自殺が、都内で起きた一連の金持ち自殺と関係があるのだろうか。

このホームは裕福な老人たちを相手にした営利施設だから、そ

の意味では都内の金持ち自殺とも関係があるかもしれない。だが、日本全国に散らばる有料老人ホームで、連続して入所者が自殺したのはこのホームだけなのだ。

県警が用意した資料の中に、ホームの資本金出資者リストというものがあつた。

株式会社全由薬品、全由ケミカル工業株式会社、ハイパーライフラボ株式会社……。

ハイパーライフラボ  
「HLL……あの会社か……」

高砂は十年前、まだ警視になる前に捜査した厚生省官僚の汚職事件のことを思い出した。

そのとき、ドアが開いた。

「お待たせしてすみません。脇本わきもとです」

高級老人ホームの理事長という肩書きから想像していたよりもずっと若々しい声に顔を上げると、派手なアロハシャツを着た男が入ってきた。高砂自身よりも明らかに十歳は年下、つまり、まだ四十代半ばくらいだろうか。

ソファから立ち上がりながら、高砂は思わず相手の顔を凝視した。

相手もすぐに気づいたようだった。

「これはこれは……。こんなところでまたお会いするとは……」  
不動産屋の営業課長のような顔には、ラフなスタイルがまるで似合わない。理事長は、口元を斜めに歪め、苦笑しながら言った。  
「まったくですね。製薬会社の広報部長から老人ホーム経営に転身ですか」

高砂はそう言うと、相手が答える前に、さっさとまたソファに腰を下ろした。

一緒にいた三人の刑事たちは、みな一様に不思議そうな顔で、二人を見比べていた。

「経営と言っても、私はただの雇われ者ですよ」

「さっそくですが、ハイパーライフラボがこのホームに納入していた商品リストを見せてください。特に医薬品関係は詳細なものをね」

高砂はそれ以上は挨拶もせず、いきなり理事長にそう告げた。理事長は当惑した表情で高砂を見つめた。

「どういうことですか？」

「今言ったとおりです。HLLがこの施設に納入していた医薬品リストを見せてくださいと言ったんですよ。紛らわしい表現はしていないはずですが」

「入所者の自殺について調べにこられたんじゃないんですか？」

「そうですよ」

「それとHLLとどういう関係があるんです？」

「それはこれから調べます。あなたは私のリクエストに応えていただければそれでいい」

理事長は憮然とした顔で高砂をしばらく見つめていたが、やがて静かな口調で答えた。

「分かりました。まあ、お気の済むように」

西武新宿駅方向へ斜めに抜ける狭い路地に、小料理屋「魚蝶」がある。

「こんにちは」

店先で魚を焼いていた女将おかみに声をかける。

「ああ、創そちゃん。ちょうどよかった。食べたら五分くらい、いい？」

女将は創司の顔を見るなりそう言った。今時、手ぬぐいを姐様かぶりになっているというのも珍しい。

「はい」

創司は狭い店の奥に進み、勝手知った調理場にすつと入る。去年還暦を迎えたという店の主が、忙しそうに皿に刺身を盛りつけていた。

「すみません。またお世話になります」

「おう」

会話はそれだけだ。

この店を切り盛りしている本多夫妻は、二人とも六砂堂の馴染み客だった。

創司は食器戸棚から茶碗を取り出し、炊飯ジャーから飯を七分くらい盛って、カウンターのいちばん奥に座った。

おかずは、自分が買って置いてもらっている瓶詰めの佃煮や、前日の付きだしの残りなどを適当につまむ。店の冷蔵庫から、生卵を一つもらうこともあるし、来る途中の店で買った納豆や豆腐を持ち込むこともある。

店に代金を払ったことはない。その代わりに、時折マッサージをしてあげる。

生薬の調合や見立ては、まだまだ師匠の嵯峨野に遠く及ばないが、指圧と鍼の腕は、並みの指圧師、鍼師よりも上だという自負はある。

ただし、創司には鍼灸師の資格がない。

職業としての鍼師、灸師、マッサージ師は、厚生労働大臣が認定する医療資格である。嵯峨野から学んだ知識や技術をもってすれば、資格を取ること自体は簡単なことだが、創司は敢えて資格を取らないでいた。

嵯峨野が「伝授」と呼ぶ教えは、一般に鍼灸師学校で教えることとはかなりかけ離れた部分もあった。仙道や気功に近いかもしれない。創司にとって、そうした「非公認」の世界を探求するこ

とは、国家資格を取ることなどよりはるかに魅力的で価値のあることだった。

「絵描きや詩人に国家資格が必要か？ わしの術は、お上に認めてもらおうようなちやちなもんじやない」

そう言う嵯峨野自身は、鍼、灸、マッサージ、すべての国家資格を持っているのだが、そのことを恥だと思っている節もあった。

「これ、うまいぜ」

主人が、小皿に目刺しを二匹のせて持ってきた。

ふと見上げ、目が合った主人の顔に、いつになく深い疲労の色が浮かんでいるのを、創司は見逃さなかった。

ただの肉体的疲労ではない。もつと精神的なものだと感じられたが、言葉には出さなかった。

「すみません。いただきます」

それだけ言うと、創司は出された二匹の目刺しに箸をつけた。

若いのに小食だと、最初の頃は主人や女将にずいぶん心配されたものだ。

質素な食事は、師匠の嵯峨野に教え込まれたもので、言ってみれば修行の一環である。

仙道の基礎的な術に「小周天」というのがある。身体の正中線に沿って、体内の「気」をぐるりと移動させていくというものだ。毎日これをやっている、自然と体質が小食になる。

主人も女将も、そうした細かいことは分からないが、創司が修行中の身であり、あまり食事をしなくても平気らしいということ、なんとなく理解している。だから今では「もつと食べる」などということは一切言わない。

食事が終わり、使った食器を自分で洗って片づけると、女将が待ちかねたようにやってきた。

店の奥に入り、指圧と整体を混ぜたようなマッサージを施す。

「ああつ。効くわー……そこ……あ……」

気持ちよさそうに声を出す女将の髪は、魚臭かった。

「うまくなったねえ、あんた。嵯峨野先生に負けない腕だよ」

「とんでもないですよ。まだまだ修行中の身です」

「そうかい？ もう何年になるかね、嵯峨野先生のところ弟子入りして」

「もうすぐ丸五年です」

「じゃあ、腕も上がるはずだね。あの、宇川って店員も弟子なの？」

女将が宇川の名を口にしたので、創司はどう答えていいものか迷った。

「いえ、宇川さんは鍼灸はやりません。で、彼は先日辞めました」

「え？ そうなの。辞めたのかい。なんかねえ、根性が足りない顔してたもんね。神主の息子だって聞いたけど、それにしちゃあ俗物だよねえ」

「神主の息子？」

初めて聞く話だったので、思わず問い返した。

「お店に入ってきた頃、本人から聞いたことがあるよ。父親は、埼玉の小さな神社の神主だとか何とか。どうでもいいことだけだね。あの男に比べちゃ失礼だけど、とにかく創ちゃんは偉いよ。嵯峨野先生が惚れ込むのも無理はないわ」

「やだな。誉めすぎですよ」

創司は、宇川がいつから店で働いていたのかよく知らない。五年前、嵯峨野に弟子入りを志願してやってきたとき、すでに宇川はいた。他に店員はいなかったが、性格が合わないの、仕事以外のことでは、あまり話をしたこともなかった。

店に新たな客が入ってきたので、女将へのマッサージはそこでおしまいになった。

店の奥で客の邪魔にならないよう、創司は自分で茶を入れて飲んだ。

この数分間が、一日のうちでいちばんリラックスできる時間だった。

女将との会話の続きをたどるように、創司はふと、嵯峨野に弟子入りするまでのことを思い出していた。

創司は、もともとは医学部の学生だった。

父親は長い間大学病院で勤務医をした後、五十近くになって病院を辞め、地方都市の住宅街に小規模な医院を開業した。一人息子の創司に後を継がせたいという思いが強く、医学部以外の受験を認めなかった。大学も、自分の恩師がいる国立大学を第一志望にするようにと強く主張した。

創司も一応はその期待に応え、父親の望みどおり、その国立大学の医学部に現役で合格した。成績も優秀だったが、時が経つに連れ、そのまま医者になる人生を受け入れがたい気持ちが強くなっていった。

これは自分の人生ではなく、父親の人生の延長ではないか――。そもそも、創司は物心ついたときからずっと、自分の父親に言いたいようなない違和感を抱いていた。

まず、風貌が似ていない。性格や習癖も、親子だと共感できるところがひとつもない。価値観もまるで違う。

母親は父よりも十歳若かったが、従順なだけのもまらない人間だった。父親は、時折創司に、おまえの優柔不断なところは母親に似た、と愚痴をこぼした。

創司もそれを感じることがあったので、そう言われてよい気持ちにはしなかった。確かにそうだ。自分が今、医学を学んでいるということこそ最大の「優柔不断」だろう。

学部在籍中は中国拳法のサークルで主将を務め、拳法の技を磨くことで気を紛らせた。

女子学生にももてたし、適当に遊んでもいた。そのうちに、結婚を真剣に考えてもいいと思える恋人もできた。

ジーンズがよく似合う、細身の美人。父親は医薬品メーカーの重役で、友人たちからもお似合いのカップルだと羨まれていた。

医師免許試験の申し込み期限直前になって、彼女に「どうしても医者になる気持ちが固まらない」と告白した。彼女は驚き、説得を始めたが、それが効かないと悟ると、最後はこう言い残して去っていった。

「今はそんなこと言っているけれど、十年後、結局あなたは医者になっっているはず。でも、そのときは、私はもうあなたの前にはいないのよ。それでいいのね？」

今でも時折彼女の夢を見る。だが、彼女にはそれっきり会っていない。

創司は公言したとおり、学部の全課程を修了してからも、国家試験は受けずに、そのまま大学の研究室に居残った。

担当教授は柄尻隆二えしじりといい、創司の父親がかつて世話になったというのはこの教授のことだった。

柄尻は通常の定年を過ぎていたが、名誉教授として大学に残っていた。感染症の専門家としてだけでなく、DNAの研究でも日本では第一人者であり、大学の看板でもあった。

柄尻研究室は、学内でも特別な存在だった。専用の設備を与えられ、各地から優秀な人材が集まっていた。医師だけではなく、生化学者、物理学者まで出入りしていた。

当時、創司は人間の身体を切り刻むという発想に疲れていて、医学とは直接関係のない、アンモニアの電子構造やインシュリン



のアミノ酸構造などというものを勉強しながら、DNAとは何かというようなことを漠然と考え始めていた。それも、今思えば、自分から興味を持ったということではなく、大学に居残るための口実に近かった。

そんなある日、DNA研究班の班長を務めていた柄尻の息子・桂佑けいすけが、創司を捕まえてこう言い渡した。

「君は逃げている。我々の究極の目的は人間のDNAを解明することだ。ヒトゲノム計画は世界中で進んでいる。これは競争だ。解明された順にどんどん特許申請がされている。君は優秀なんだから、もっと核心を突くテーマに取り組んでくれなければ困る。明日からは、血液研究班に加わってくれ」

柄尻研究室には、DNA研究用のサンプルとして、膨大な種類の血液保存庫があった。輸血などに使うわけではなく、あくまでもDNAの研究に使う目的で、大学付属病院から分けてもらったものの他、学生や教授が自らの血液をサンプルとして提供していた。

ある日、研究のために、その血液サンプル保存庫に入る機会があった。血液提供者リストを検索していると、自分と同じMoriyasuとこの名前があることに気づいた。

調べると、それは自分の父親の血液だった。父親はかつて柄尻の下で研究していたから、そういうものがあっても不思議ではない。

そこでふと思い立ち、父親の血液サンプルを少量盗み出してDNA鑑定を試してみた。結果、半分予測していたとおりの答えが出た。

創司は父親の実子ではなかったのだ。

どういう理由で守安家の長男として育てられたのかは分からない。だが、はっきりしていることは、自分と父親とは血が繋が

っていないということだ。

創司はその事実を知って、むしろほっとした。

父親に対して抱いていた違和感も、これで説明がつく。

そのことについて、創司は両親を問いつめることもなかった。

それ以降、創司はますます研究からは逃避するようになっていった。

柄尻桂佑は、そんな創司を許さなかった。

ことあるごとに叱りつけ、提出したりレポートを無視するなど、いじめに近いような仕打ちをすることもあった。

創司は、もともと桂佑とは相性が悪かった。一度、他の学生から、桂佑と顔の輪郭が似ているなどと言われたことがあったが、とても心外だった。髪をきつちり七三に分けている桂佑とは正反対になるうと、わざと長髪にしたほどだ。

ある日、桂佑は、医学部の学部生たちを実験室に集めて特別授業をした。そこに助手として創司も同席させられた。

内容は、ウサギの殺し方だった。

「ウサギはこうやって殺すんだ」

桂佑は二匹用意したウサギのうち、一匹の耳を無造作に掴んで抱えると、プラスチックでできた筒状の保定器に入れた。そして、頭だけ出されたウサギの耳の血管に空の注射器を刺し、空気を注入した。

ウサギはほとんど身動きできない筒の中で必死にもがこうとしていたが、やがて、ぐったりと動かなくなった。

「昔はこういう便利なものがなくてね。バタバタ暴れるウサギをしつかり抱え込むにはそれなりの技術が必要だったが、今は軟弱にこんな風にして殺すわけだ。OK。じゃあ、君たちの優秀な先輩・守安君に手本を示してもらおう。よく見ておきなさい」

そう言うと、柄尻桂佑は、二匹目のウサギの耳を鷲掴みして、創司のほうに放り投げるようにして渡した。

創司は怯えるウサギを抱き留めると、静かな口調で柄尻に言った。

「生意気言うようですが、ウサギは耳を持ってはいけません。痛いんです」

柄尻の目の奥が冷たく光った。

「私はウサギの殺し方を教えているんだ。ペットとしての飼育法を教えているわけじゃない。殺すウサギが痛がるのが苦しもうが意味がない。要は、効率よく殺せればいい。さあ、やりたまえ」

創司は結局、ウサギを殺せなかった。

実験室に用意された二匹のウサギは、創司の目の前で殺された。いった。「殺し方」をマスターさせるためだけに死んでいったのだ。貴重な実験動物をそんな風に扱うなど、普通には考えられない。柄尻が私的にストレスを発散させたとしか思えなかった。

その数日後、創司は研究室を去った。

息子が大学を辞め、医者になることも拒否したことを知って、父親は激怒した。母親はおろおろするばかりだった。

そのときも、創司は両親に自分のルーツについて訊ねることはなかった。親なんてどうでもいい。親が誰であったところで、自分分は自分でしかない。それに、もしかしたら、父親は何も知らないのかもしれない。それならそれでいいと思ったのだ。

少しの間、アルバイトをしながら適当に暮らしていたが、医学部在学中から、中国拳法を通じて東洋医学に興味を持っていたこともあり、五年前に六砂堂を訪ね、半ば強引に雇ってもらった。

店の二階に寝るだけの場所を与えられた代わりに、ほとんど無給と言っていいような低賃金。衣類以外のものは、ほとんど所有

することも不可能という生活だった。

そんな生活を心配して、母親が何度か様子を見に来たりもしていたが、今ではもう諦めたようだった。

父親はその後、急に生きる張り合いを失ったかのように病死し、医院も自動的に消滅した。その半年後、母親も交通事故に遭い、後を追うように死んだ。

もう、自分のルーツを確かめる術はないし、しがらみもない。創司はもうすぐ三十三歳になるが、今の生活が結構気に入っていた。

無影灯がともる部屋の中で、水色の手術着を着た男たちが、台の上に全裸で横たえられた一人の女性を見下ろしていた。

顔のほとんどは大きなマスクで覆われ、目にも感染防止用のゴーグルをしているので、男たちの表情は一切分からない。

手術台の上の女は微動だにしなかったが、死んではいなかった。その証拠に、女の鼻と口は、酸素マスクで被われていた。

「林檎はまだ使えそうか？」

「いえ、ぼろぼろですね。もう、これが限界でしょう」

「黒か。OK。では取り出そう」

リーダーらしい男の静かな声とともに、作業は始まった。

執刀医の握るメスが、女の下腹部にあてられ、すっと一直線に引かれた。

女の乳房が、わずかに揺れた。

彼女が自分の身体に何が起きているのか、気づくことは二度となかった。

テーブルの上に置かれたバーボンの瓶を見ると、中身はもう半分近くなくなっていた。

手にしたグラスには、溶けた氷でまずそうに薄まったウイスキーが一センチほど残っている。

「私を捨てるのね？」

脳裏に、あの声が、また蘇った。

長い間忘れていたのに。

瀬名は、その声をかき消すように、グラスに残っていた液体を喉の奥に流し込んだ。

昨日の午後、仕事がひとつキャンセルになって時間が空いたので、あのシータという少女と会いたくなり、連絡を入れた。

「フゲン 付きの少女売春申し込み」は、携帯電話会社がオプションサービスでやっている伝言サービスを利用するよう指示されていた。そこに自分の名前と、希望日時を吹き込むと、向こうから連絡が入る。

恐れ入りますが、ご希望の日時にはうかがえません という返事が来る場合も多い。

瀬名は、あの薬の効き目とともに、少女の身体の虜にもなっていた。

最初のとくに二錠買ったフゲンのうち、残った一錠は、後日、他の女とのセックスの前に試してみた。効いたことは効いたが、シータのときほどは精神的な満足感が得られなかった。

彼女を相手に、もう一度あのめくるめく快感を味わいたい。毎日、考えるのはそのことだけだった。

殺人的なスケジュールの合間を見つけては、何度か申し込みの伝言を入れ続けたが、二度目にシータと会えたのは、十回近くの

申し込みの後だった。

「すみません。私たち、メンバーが少ないし、時間もあまり自由にはならないんで、お客様のご希望に添えないことが多いんです」  
シートからはそう説明された。

二度目のときは、初めてのときよりもさらに強烈な快感が得られた。しかし、行為の後、数時間すると、魂が抜けたような状態になる。快感の裏返しのような虚無感に襲われる。

その脱力した時間が通り過ぎると、再び快感の記憶が甦る。数日も経たないうちに、またすぐに彼女を求めたくなる。その飢餓感時は時とともに増していく。

昨日も、無理だろうと諦めながら何度も伝言ダイヤルにメッセージを入れた。夜八時過ぎによく連絡が入ってきた。

あいにく、シートは夜は出られないんですが、別の子なら空いております。いかがいたしますか？

シートの声ではない。いつも連絡してくる女性は、シートよりも少し堅いトーンの声で、事務的な喋り方をする。

「その子でいいよ。頼む」  
少し迷ったが、結局、フゲン 欲しさに、瀬名はそう答えた。

小一時間後、指定されたホテルの部屋を訪ねると、シートと同年代くらいの少女が出迎えた。シートよりも髪は短く、シャギーカットが快活な印象を与える。ジーンズに男物のシャツなどを着せたら似合いそうだ。

意志が強く、利発そうな顔をしている。

シートとどちらが魅力的か、好みが分かれるところだろうが、瀬名はすぐに気に入った。

「テトラです。もし私ではお気に召さなければ、お薬だけお売りして失礼しますけれど、料金は同じです」

その声と事務的な口調で、電話で連絡役をしている少女だと分かった。

「そんなもつたいないことはしないさ」

瀬名はテトラと名乗った少女の肩を抱いて、ベッドサイドに誘った。

驚いたことに、テトラもまた、瀬名のことを知らなかった。

本当に自分のことを知らないのか、それとも気を遣わせないための演技なのか探るために、瀬名はそれとなく音楽の話題を出してみた。

「普段、どんな音楽聴いてるの？」

「ジャズかボサノバですね」

テトラと名乗った少女はクールな口調で答えた。

「へえ、高尚な趣味だね。日本人のバンドは？ ライド4とかPジャンクとかCPUゼラとか……」

自分たちがやっているCPUゼラだけでなく、他にも二、三売れているバンドの名前を挙げてみた。

「私、本物の音楽にしか興味がないんです」

と、少女はクールな口調で言った。

「本物？ どういう価値基準で本物だとか偽物だとか言えるのかな。売れているということは、それだけで少なくともビジネス的には本物だつてことだぜ」

瀬名は内心むっとしながらも、それを悟られないような軽い口調で訊いた。

「売れるというのはたまたまでしょう？ いろいろなことが偶然重なって、たまたまCDを何百万枚も売るバンドになっただけ。必然性なんて何もないでしょ」

少女の言葉が、瀬名の心を突き刺した。

そう。そのとおりかもしれない。

自分でも分かっていった。心の奥底では、そう思っていた。

日本でいちばんCDを売り上げるバンドで歌っている男が自分でなければいけないという必然など、何も無い。町中ですれ違う男たちの誰かでも、多分同じ、あるいはもつといい結果が生まれているかもしれない。

自分より美形な男はたくさんいる。自分より歌のうまい男はさらにたくさんいる。自分よりセクシーで、カリスマ性のある男だつていくらでもいる。今の自分があるのは、もちろん、そうありたいと願い、努力し続けた末の結果だが、何よりも「たまたま」そうなれたという、運の要素がいちばん大きいだろう。

まともに言い当てられたのは初めてだった。

自分である必然は何もない。たまたまだ……と。

しかし、他のメンバーはそうは思っていない。自分たちの実力で今の地位を勝ち取ったと思いきこんでいる。だから、悩むことなく、金を使い、毎晩別の女を抱く。

彼らには言っていないが、瀬名はすでに、事務所の社長から独立の打診を受けていた。

「どんな人気バンドも、永久に続けられるわけじゃない。CPUゼラの『顔』は、言うまでもなくおまえだ。俺は解散後のことまで考えて動いている。それを忘れるな」

商品としての賞味期限を、バンドの連中は考えてもいない。

だが、瀬名は違っていた。今の生活は、ゲームに勝った結果にすぎない。四十になってもロックを続けられるだけの技量とカリスマ性が自分にはあるのだろうか？ 役者に転向するなどという器用さはまったく持ち合わせていない。歌唱力にしたって、バンドという形だからごまかしているが、ギター一本で弾き語りをしてみると言われたら自信がない。

たまたま得た人気は、続く保証もない。



気がつくくと、手の中のグラスには、入れたばかりの琥珀色の液体が入っていた。無意識のうちにもまた注いでいたらしい。

なぜだろう、視界が、青いフィルターをかけたようにくすんでいる。

テトラの身体は、シータとは違った魅力があった。

全体にシータよりも堅い。乳房も、シータよりもやや小振りで、仰向けになってもあまり形が崩れない。

腰のくびれかたが特に美しく、瀬名は何度も何度も脇腹から臍のあたりにかけての曲線を唇と舌で愛でた。

シータはすべてを素直に受け入れてくれる優しさを持っていたが、テトラは、ベッドの上でも自分の意志をしつかり保っているのが分かった。その確固とした「個」を主張する肉体に、自分の一部を挿入する感覚が狂おしかった。

金の力で若い女を自由にするという征服感ではない。強い意志を持った肉体を引き裂き、その奥深く入り込んでいくという行為に、生物としての根元的な感動を感じるのだった。

フゲンは、シータを相手にしたときと同じくらい効果を発揮していた。途中からはもう何も分からないほど身体中が歓喜と快感に包まれた。

そして絶頂に達する寸前に、「あの声」がしたのだった。

「私を捨てるのね？」

もう止まらないほとばしりの中で、はつきりと聞こえてきた声。それは、無名バンド時代、自分を支えてくれた妻の声だった。

レコード会社と契約し、デビューが決まった後、しばらく別居してほしいと申し出たときに、妻が言った言葉。

あ の とき、瀬名は必死で説明した。

「捨てるわけないじゃないか。必ず俺たちの関係を公にできる日が来るよ。でも、今はいちばん大切なときなんだ。分かってくれよ。俺がミュージシャンとして成功するかどうか、人生最大の賭けなんだ。人氣が確定するまで、独身ということにしたいんだ。おまえを捨てるわけないじゃないか。ここまで来れたのも、みんなおまえのおかげなんだ。捨てるだなんて、馬鹿も休み休み言え。俺はそんな卑怯者じゃない」

そんな言葉を次々と速射砲のように妻に浴びせた。

翌日、妻は無言で部屋を出ていった。

妻とは、入籍はしていなかった。だが、役所から婚姻届の用紙をもらってきて、二人でサインをし、「今日から俺たちは夫婦だ。俺がバンドでおまえを食わせていけるようになったら、晴れて二人で役所に行って提出しような」と誓い合った仲だった。

その婚姻届は、何度かの引越しの間に紛失してしまった。

妻は平凡なOしだった。まったく金が稼げなかった瀬名に代わり、経済的にはほとんど彼女が支えてくれた。彼女が部屋を出て行ってからも数か月は、瀬名は妻の口座のキャッシュカードで生活をしていった。

妻は特に美人でもなく、むしろ地味な女だった。年齢も瀬名より三つ上で、デビューし、成功してからは、簡単に寄ってくるどんな女たちより、見劣りがした。

デビューから成功までの時間はそう長くはかからなかった。しかし、瀬名が妻を迎えに行くことはなかった。

そう……はつきりと「捨てた」のだ。

「たまたまじゃない」

テトラという少女の言葉がエコーした。

その「たまたま」の中には、妻が売れない時代を支えてくれていたという幸運も含まれている。

カリスマ性を持続させるだけの図太さが、自分にはもともと欠けているのだ。他のメンバーのように、何も考えずに人気に溺れていられたらよかったのに。

なぜこんな神経質な性格に生まれてしまったのか。

味のしないバーボンが入ったグラスを、また口にあてていた。視界はまだ青い。この青さはなんなのだ？

瀬名は目を細めた。

ふと、テトラと抱き合ったときの快感が蘇った。

あの快感が、別の形で待っている。そんな気がした。

究極の快感の先には、虚無ではなく、安らぎが待っているはずだ。

快感は、安堵とセットになっていなければ完結しない。

あのめくるめくひとときの続きが、まだ残っている。

……ああ、そうだったのか……。

この青さは、その安らぎへのプロローグなのだろう。

そう気づいた瞬間、景色がさらに青く、藍色のように染まっていった。

グラスがするりと手の中から落ちて、床に転がった。

しかし、その音が聞こえない。

誰かに背中を押されるように、瀬名はベランダに出ていた。

裸足なのに、足の裏からコンクリートの感触が伝わってこない。

空は白んでいるようだが、夜明けなのか夕暮れなのかも分からなかった。

空以外のすべてが青い。

向かいのビルも、靖国通りを行き交う車の波も。目の前のフェンスも、人工物がすべて青く見えている。

ふわりと身体が浮いた。

いや、浮き上がるはずはない。自分でフェンスを乗り越えようとしている。行動の異常さには気づいているのに、制止するための脳の命令がうまく伝わらない。

どうやらフェンスの上によじ登ったらしいのだが、手にも足にも、何かが触れている感触がない。

身体全体が宙に浮いているのと同じだ。

もしかしたら、本当に浮いているのかもしれない。

そう思ったとき、頭が急に低くなった。

地面に激突する直前に、ようやく脳の奥で何かが叫んだ。

「あの薬のせいだ。騙されるな！」

もちろん、気づいても、もう遅かった。

七月ももう終わろうというのに、梅雨明け宣言はまだ出なかった。断続的に大粒の雨を落とす不安定な空の下、東京・最上寺の仁王門に向かって、若者たちが長蛇の列を作っていた。

列の先では、人気ロックバンド「CPUゼラ」のヴォーカリスト「ミッチ」こと、瀬名美智郎の追悼式が行われていた。六日前に、高層マンションの九階にある自宅ベランダから投身自殺した彼を偲んで集まってきた若者の数は、三万とも四万とも報じられた。

ヘリコプターが空撮した絵を、テレビが電波に乗せる。

画面が切り替わり、派手な化粧をした少女たちが、涙を流しながらカメラに向かって叫んでいる。

いやーっ

信じらんない。ミッチ、かわいそう……

語彙が極端に少ない同世代の子たちを、テトラこと境柚梨は、

ベッドの上から、顔だけを横に向けて見ていた。

早くも後追い自殺者が十人を超えたというニュースも流れた。

みんな、これだけは約束してくれ。後を追うなんて、ミツチが悲しむだけだ……

テレビカメラに向かって、瀬名のバンド仲間が呼びかけた。

「君は行かないのか？ ミツチの追悼式」

隣に横たわる、腹のたるんだ中年男が、テレビを見やりながら言った。

たつた今、行為を終えたばかりなのに、男の陰茎は見事に屹立したままだ。

「興味ないもの」

柚梨は天井を見上げて呟いた。

「いいねえ、その突っ張った感じ。たまんないよ。それにしてもさ、一錠ゲーマン五万は高いよ。闇でもせいぜい一錠デーマンゲーセン二万五千円ってところだろう？」

わざとらしくバンドマン用語を使うこの小太りな男は、芸能事務所の副社長ということだった。

これが三回目だが、最初的时候は、言葉巧みにタレントにしてやるから……と誘った上で、代金を値切ってきた。

柚梨は突っぱねた。

「オジサン、まさか普通のフゲンアルファと間違えているわけじゃないでしょ？」

柚梨は、客によって言葉遣いを巧みに使い分けていたが、この客に対しては、当初から、こうした下卑た口調を通すことに決めていた。

「オジサン、は試したことあるの？」

「ああ。何度もね」

「効いた？」

「まあ、そこそこね。こんなにはならないけどさ」

男は股間に視線を落とし、苦笑を浮かべながら言った。

「じゃあ、分かってんじゃない。これは じゃなくて、 なの。を欲しがっている人はいっぱいいるの。二錠で十万なんて、こんな良心的なレートはないよ。それに、八万は私のギャラ。だから一錠は一万円の計算。まさか、私がただで寝てると思ってるわけじゃないよね、オジサン」

柚梨はそう言うと、勃起したままの男の一物を、中指の先で軽くはじいた。

先端に付着していた薄い精液が、小さな滴になって飛んだ。

「じゃあ、まとめ売りはしないのか？」

「十錠で五十万とか？ オジサン、まとめ買いするだけのお金、あるの？」

「いや、ないな。残念ながら」

「じゃあ、私たちがまとめ売りしないのを感謝してもらわなくちゃ。まとめてやくざにでも売り飛ばしたら、オジサン、きっと次はそのやくざルートから、一錠二十万とか、とんでもない値段で買わなきゃならなくなるよ。私やシータみたいな可愛い女の子もついてこないし」

「はいはい。かなわないな、まったく」

男はようやく起きあがると、つけっぱなしのテレビにリモコンを向けて、音声だけを消した。

「ミツチも終わっちゃったか。早いよな。まだ三年は稼げたのに、馬鹿なやつだ」

そう呟くと、男はバスルームに入っていた。

シャワーが勢いよく噴出する音がしてきた。

その音を聞きながら、柚梨は枕元のスイッチで、テレビの電源を切った。

画面は見ていなかったので、その瞬間、音声が消されたテレビに、臨時ニュースのテロップが出ていたことには気づかなかった。ミッチこと故・瀬名美智郎さんのマネジャー 濱口俊彦さん（42）が自殺

宇川がいなくなり、創司は店番をする時間が長くなった。

客がいない時間を見計らって、納品関係の書類などを、もう一度洗い直してみた。

フゲンは、ここひと月ほど、入荷がゼロということになっていたが、調べてみると、仕入れ帳に記載されないうまま、いくらか入荷されていたらしいことも分かった。

宇川は、フゲンの入荷だけを帳簿から除外し、別個に扱っていたようだ。店に置いてあるのは見たことがないから、こっさりどこかに隠していて、常連客に高く横流ししていたのだろう。

さらに探すと、裏帳簿と納品伝票が出てきた。それを見ると、店では決して扱わない向精神剤や睡眠薬の類も、少量だが問屋から取り寄せていたらしい。

それと一緒に、奇妙なコピーの端切れが見つかった。大半がかすれている。トナー切れか紙詰まりで、コピーに失敗したものがきちんと破棄されずに残ってしまったのだろう。間抜けなやつだ。読める部分を読みとると、名前と連絡先が列記してある。

〔デックス dex@iyomantenet.ne.jp

山田太郎 090-8821-XXXX.....〕

名前はどれも偽名だろうし、電子メールアドレスか携帯電話の番号ばかりで、一般加入電話の番号は一つもない。これが裏ルートでの顧客名簿だとすれば、宇川は店経由だけではなく、どうやらインターネットも使って、勝手に薬物を売りさばっていたのか

もしれない。

しかし、店の金をごっそり持ち逃げするならともかく、この程度のちまちました内職で、それほど儲かったとは思えない。

「小人こひんことはそういうものだ」

と、嵯峨野は言っていたが、創司はなんともやりきれない思いだった。

宇川が残っていた書類ケースの中に、なぜか神社のお札とおみくじが混じっていた。中貉白山神社 とある。「なかむじな」と読むのだろうか。

魚蝶の女将が言っていた「神主の息子」という言葉を思い出した。実家なのかもしれない。

数日後、店に、突然、あの少女がやってきた。

宇川と怪しげな取引をしていた少女だ。

少女は何も言わずにカウンターに近づくと、まっすぐ創司の目を見つめた。しかし、何も言葉を発しない。

「いらっしやいませ」

間がもたず、創司のほうから声をかけた。

少女は、先に声をかけられるのが当然と言わんばかりの表情で、ほんの少し口元をほころばせた。

「もう一人の店員さんに用があるんですけど。背の高い……」

「宇川ですか？ 宇川なら辞めました」

「いつですか？」

「先週です。何か個人的な御用でしょうか？ それともお薬のことなら、私が承りますが」

「じゃあ、いいです」

少女はきびすを返すと、すぐにまた店を出ていこうとした。

「あ、待って」



咄嗟にそう言っていた。

先日の怪しげな取引がなんだったのか、確かめたかった。が、店の中でいきなりそう問い詰めるわけにもいかない。

細かい作戦を練っている時間はないので、はったりをかませることにした。

「君のことは宇川から聞いてるよ。メモのことだろう?」

突然口調が変わった創司のほうを振り向き、少女は、初めて不安そうな表情を浮かべた。

あのときの紙片がなんなのかは分からない。しかし、薬そのものではないことは確かだった。あれが初めての取引ではなかったのだとすれば、少女は宇川がクビになったのを知らず、次の分を求めてやってきたのかもしれない。

少女は疑わしそうに創司を見ていた。明らかに「メモ」という言葉に反応している。

創司は畳みかけるように言った。

「やつは今、ちよつとまずいことになって、身を隠しているんだ。メモは俺が預かってる。宇川とは仲間なんだ」

「じゃあ、あなたにお金を払えばいいわけ?」

「そう。俺じゃあ信用できない?」

「そういうわけじゃないけど。……じゃあ、リストをちょうだい。新しい分の」

創司がメモと言ったのを、少女は「リスト」と言い換えた。なんのリストだ? 顧客リストのことだろうか。

すぐに、裏帳簿と一緒に出てきたコピーのことを思い出した。あれがそうだったのか……?

「新しい客のリストは、まだそんなに増えてないんだ」

「何人分?」

よし、当たりだ。これでほとんど間違いない。

「三、四人分かな」

「それでいいわ」

そのとき、二階から、嵯峨野と飲み屋のママが一緒に下りてきた。嵯峨野が鍼治療をしていたのだ。

「ここじゃまずいから、麗裸レイラの横で待つててくれないか。すぐ行くから」

創司は咄嗟に、先日、宇川がこの少女と取り引きしていた現場を指定した。

「じゃあ、五分だけ待つてる」

そう言うのと、少女はまだ不審そうな表情のまま、店を出ていった。

少女の姿が見えなくなると、創司はこの間見つけた予約客リストの失敗コピーを広げた。

これのコピー元は、多分、前回、あの少女に売り渡したのだろうと想像し、同じ用箋を使って、同じ体裁で偽のリストを作り始めた。

リストのいちばん上には、板倉という偽名と、自分の携帯の電話番号を書いた。二番目以降には、でたらめな名前と電子メールアドレスを二人分並べた。

その偽の「顧客リスト」を作成しながら、一体これはなんの客なのだろうと考えた。

フゲンの予約客リストだろうか。しかし、そんなものを、あの少女が金を出して買い取るとは考えられない。宇川がフゲンを横流ししていたのなら、なおさらだ。少女にリストだけ売る意味がない。

医者の方が必要な向精神剤の類を裏で売っていたとしても、なぜ少女にリストを渡すのかが分からない。それなら自分一人でやればいいはずだ。

分からないまま、カウンターに入ってきた嵯峨野に言った。

「師匠、ちよつと出てきていいでしょうか？」

「飯か？ 早いな。まあいい。今日はもう治療の客は来んから、少しゆっくりしてきてもいいぞ」

今来た少女のことを説明しようかと思っただが、分かるように話すには、先日の宇川とその少女の怪しげな取引のことから話さねばならないし、長くなりそうなのでやめた。

創司は作ったばかりの偽の顧客リストをポケットに入れ、店を出た。

飛行機の爆音のような音が聞こえている。

一升瓶を入れたスーパールの袋を下げたまま、男は空を見上げた。しかし、雲が厚く、何も見えない。

雲なのかスモッグなのか分からない。どっちでもいい、東京の空はそんなものだ。最近、空を見上げたことなどなかった気がする。

いつのまにここに来ていたのだろうか。

男は周囲を見渡した。

歌舞伎町の中、雑居ビルの屋上ということには分かっていた。だが、どうやってここまでたどり着いたのか、どうしてここにやってきたのかは、頭がぼんやりして分からない。

「私を足蹴にしても、音楽の道を極めてよ」

痛みと侮蔑が入り交じった声が、頭の中で甦った。

あれは何年前のことだったのだろうか。

ジャズベーシストとしての生活に行き詰まり、芸能事務所のマネジャー見習いを始めた頃だから、もう十二年も前のことになる。それまで信じきっていた妻が、若い男に狂っていることを知っ

たときの驚きは大変なものだった。

二十三歳で結婚して十五年。深刻な夫婦喧嘩さえしたことがなかった。年より十歳近く若く見える妻との生活は、友人たちからも羨望の眼差しで見られたものだ。

しかし、生活は苦しかった。ベーシストとしての腕は悪くなかったと自負しているが、純粹にジャズの世界で生きていけるほど、世の中は甘くなかった。

いつしか妻の態度や言葉に刺が混じることが多くなり、やはりきれいな事ではなく、金を稼がなければと、あがき始めたときだった。

同い年の妻は三十八歳。その妻が、十歳以上年下の会社員とつきあっていることを知った。仕事で遅くなると嘘をついてはその男と酒を飲み、デートを重ねていたのだった。

それでも、最初は一時的な気晴らしだろうと高をくくっていた。妻は疲れているのだ。自分が頑張つて稼げるようになれば、また心は戻ってくる。

しかし、甘かった。妻は若い男に恋をしていただけではなく、それ以前に、夫に愛想をつかしていたのだった。

「俺を捨てるのか？」  
思わずそう訊いていた。女々しい言葉だということは承知の上だった。

「捨てる？ 逆でしょう？ 芸術家を気取るなら、私を足蹴にしても音楽の道を極めてよ。女が、魅力のある男に走るの当たり前よ。奥さんがよくできた女だから、あいつはミュージシャンとしては大成できないんだなんて陰口叩かれて……冗談じゃないわ」

結婚して以来初めて聞いた、妻からの罵倒だった。

何度かの修羅場の後、すべてが終わった。

妻を失ったとき、自分の音楽人生も終わった。

それから今までの人生は、オマケのようなものだ。芸能事務所での仕事は成功したが、仕事の内容は、音楽からはほとんど離れていった。芸のないタレントを次々にテレビ局に送り込み、使い捨てていく女術商売。

今では副社長という肩書きを持ち、かなりの高給も取っている。金が入るようになってからは、女にも不自由したことはない。しかし、かつての妻と比較できるほどの女には、二度と出会えなかったし、今後もしも出会うとは思えなかった。

風の噂では、離婚後、彼女は狂ったように次々と若い男を相手にし、三人目の男と再婚したらしい。その後、どうなったのかは知らない。

別れた妻のことを思い出すと、今でも心臓のあたりに鈍い痛みを感じる。

ふた月ほど前、テレビ局のプロデューサーからの紹介で、フゲン という秘薬を売る少女売春グループのことを知った。

やってきたテトラという少女は、知的な美少女で、別れた妻の若い頃に似ていた。生意気な口をきく少女だったが、それが絶妙の刺激になった。

妻も、心の奥ではいつもこんな風に思っていたのかもしれない。それを口にせず、「よくできた女房」を演じ続けた果てに爆発したのだろうか。そう思うと、テトラという少女を抱くとき、もう一度人生をやり直せるような錯覚さえ覚えた。

フゲンは噂以上の薬だった。

単にインポテンツが治るだけでなく、精神的な快感が素晴らしかった。薬が効き始めると陶酔状態になり、行為の最中のことはほとんど覚えていないほどだった。

しかし、後になって、感じた快感以上の深い悲しみと虚無感が

訪れる。その正体はよく分からない。

手に、スーパーの袋の重みが甦った。

一升瓶が一本入っているが、中身は酒ではない。ガソリンだ。これを使う場所を探しているうちにここにきてしまったのだ。た。

飛び降りるにはこのビルは低すぎる。死ぬるかもしれないが、死ねないかもしれない。夢遊病者のように行動しながらも、そうした計算は冷徹にしているところが不思議だった。

一升瓶の蓋を取ると、ガソリンのにおいが鼻を突いた。

両手で持ち上げ、頭の上から身体中に浴びせた。

目の前には、錆が浮いた手すりがある。乗り越えるのはそれほど大変ではないだろう。

知らないうちに、景色が妙に青く染まっている。

足下のコンクリートも、スモッグの向こうにかすむ西新宿の高層ビル群も。

ライターに火を点す。

身体中が炎に包まれても、なぜか熱さは感じなかった。身体の中の水分が一気に蒸発して、軽くなったような気がした。

浮き上がってみようか……そう念じてみると、本当に身体がふっと宙に浮いた。

ああ、飛んでいる。このまま妻のもとへ飛んでいけば、彼女は見直してくれるだろうか。

でも、どこにいるのだろう。彼女ももう五十歳になっているはずだ。今なら、嫉妬も超えて、互いの自己愛の半分ずつを交換できるかもしれない。

今、飛んで行くから……。

そう念じて、男は空に吸い込まれていった。

少女はそこで待っていた。

雑然とした階段室に創司が入っていきなり、彼女は「何人分？」と訊いてきた。

「三人分だ」

「見せて」

少し緊張したが、創司はさっき作ったデタラメの顧客リストを渡した。

「じゃあ、これ」

リストの中身を確認すると、少女は財布から一万円札を三枚抜き取り、すつと差し出した。

創司は戸惑いを隠しながらそれを受け取り、ポケットに入れた。このまま別れてそれきりになってしまったら、ただの詐欺師になってしまう。しかし、ここで演技をやめるわけにもいかない。

少女は挨拶も交わさず、すぐに通りへ出ていった。

見失わないよう、創司は少し距離をおいて後をつけ始めた。

少女は後ろを振り向くことはなかったが、つけられていることを知っているかのように、足早に雑踏の中へと入っていく。創司もつられて歩を速める。

そのとき、背後で女の悲鳴が上がった。

振り向くと、道の一角に、そこだけ時間が静止したような空間ができていた。

炎に包まれた黒っぽい塊が地面の上にあった。人間だということとはすぐに分かったが、身体が奇妙な形によじれ、頭からは血が流れている。

「身体に火をつけて飛び降りたんだ」

「自殺かよ。巻き込まれたらこっちも死ぬぜ、おい」

遠巻きにしてざわめく人垣をかき分け、創司は倒れている男のそばに行き、様子を見た。

冬ならばコートを被せて火を消すところだが、真夏ではそれもできない。それに、確認するまでもなく、もう絶命しているだろう。

肉が焦げるにおいが漂う。

見上げると、四階建てくらいの雑居ビルがあつた。通りに面した窓はすべて閉まっているから、飛び降りたとしたら屋上からだろう。

先日のソープラントでの自殺者に続いて、この歌舞伎町で立て続けに自殺現場に遭遇したことになる。

「あんた、この人の知り合い？」

気がつくと、警官が来ていた。

「いえ。通りがかつただけです」

「じゃあ、どいてどいて。邪魔だから」

創司は乱暴に肩を掴まれ、その場から押しやられた。取り巻く人垣の中に、あの少女の姿はもうなかった。

シャールレの中には、白っぽいペースト状のものが入っていた。それを見つめながら、男は抑揚のない声で訊いた。

「第三領域？」

「はい。やはり アミロイドが大量に付着していました。所長の推理は当たりましたね」

所長と呼ばれるにしてはまだ若い、四十前後くらいのその男は、シャールレから目を離すと、机の上に置かれたカルテを取り上げ、言った。

「白戸佐由理、三十八歳。血液型Oプラス……か。どういう素性



だったかな」

「参議院議員・音山育朗の愛人です。音山は先週、自宅で首吊り自殺を遂げています。この白戸という女も、アイランダーがここに運んできた後、急速に鬱状態が進みまして、処置室で何度も自殺を図っています」

「本来なら順番は逆なはずだが、やはり組織が若い分、結果も早く出るということだろうね。で、林檎は？」

「すでにBチームに渡して分析を進めています」

「きつちり調べた後で、ジヤムを作ってください」

所長と呼ばれた男は、そう言ってシャーレを部下に返した。

「承知しております」

部下は渡されたシャーレを恭しく持って部屋を辞した。

腰に下げた携帯電話が振動した。

昼の十二時十分。店に客は誰もいない。

「はい」

板倉様でしょうか？

あの少女からの電話だった。

渡した偽リストのいちばん上に、自分の携帯電話の番号と、板倉一郎という偽名を書いておいたのだ。

「そうです」

創司は少し声のトーンを変えて答えた。

はじめまして。わたくし、フゲンのお届けサービスをしています。よろしかったら少し説明をさせていただきます。ですが、今、お時間よろしいでしょうか？

……そう来たか。

創司はあの少女の顔を思い出しながら、声色を変えたまま訊い

た。

「フゲン って、本当に効くのかな。インチキ商品を高く売りつけているだけなんじゃないの？」

はい。そうお疑いになられるのはごもつともだと思えます。そこで、わたくしどもは、初めてのお客様には、効き目を直接体験していただいております

「というと？」

販売員がお客様のもとにうかがい、その場で一錠お試しいただくというシステムです。効き目が現れなければお代はいただきません

「相手をしてくれるってこと？」

はい。容姿端麗な若い女性がお相手いたします

「で、いくらなの？」

二錠で十万円です

「一錠五万？ とんでもない値段だな」

みなさん、最初はそうおっしゃいます。でも、一度だけでやめてしまわれるお客様はいらっしゃいません。みなさん、リピーターになってくださいます。これは本当です。わたくしどもはフゲンの効き目に絶対の自信を持っております

「ほんとに？」

はい。どうですか？ お試しいただけますか？ フゲンは他では絶対に買えません。このチャンスを逃しますと、きっと後悔なさると思います

なかなか堂に入ったセールストークだ。創司は思わず苦笑した。「分かった。試してみよう。どうすればいい？」

ありがとうございます。場所は新宿近辺のホテルをこちらでご利用いたしますが、大丈夫ですか？

「新宿界隈ならすぐに出ていける」

では、ご都合のよい日時を教えてください……

店番のことも考えて、翌々日の夕方ということにした。

「こつちから連絡はできないの？」

申し訳ございません。これは秘密を厳守していただかなければならないビジネスですので、初めてのお客様の場合は、ご連絡はこちらからのみさせていただきます。それでは、明後日の午後、またお電話させていただきますので、よろしくお願いいたします

「あ……」

引き留める間もなく、電話は一方的に切れた。

と同時に、入口の戸が荒々しく開けられ、およそ客には見えな  
い男が二人入ってきた。

一人は痩せ型で背が高く、一八〇はありそうだった。シルクシヤツの襟は第二ボタンまで開いていて、胸元から金のネックレスがのぞいている。三十代半ばくらいだろうか。

もう一人は背は低いががっちりした体格で、無精髭を生やしている。窮屈そうに着た麻のジャケットの襟には金色のバッジが光っていた。

「うがわ宇川か？」

金バッジの男が、いきなり創司を睨みつけてそう言った。

「いいえ。宇川は店を辞めましたか？」

「辞めた？」

「ええ。先週辞めました」

「じゃあ、社長は？」

「店主は奥にありますが、どんなご用件でしょうか？」

「それは直接社長に伝える」

「宇川が何かトラブルを起こしたんでしょうか？」

創司は問い返した。

男は、鼻でフンと笑うと、カウンターのの上に片手をつけて、身

を乗り出すようにして言った。

「番頭さんに説明している暇はねえんだ。さっさと社長に取り次ぎな」

「ちよっとお待ちください」

奥の調剤室に行こうとしたとき、調剤室のドアが開いて、嵯峨野が出てきた。やりとりが聞こえたのだらう。

「わしがこの店の主だが」

そう言いながら、嵯峨野は男の襟元に光るバッジに目をとめた。

「貴島組か？」

男たちは黙って嵯峨野を睨み返した。

「宇川が何かしたのか？」

「そのことで会長が直接話をしたがつてます。一緒に来てもらえませんかね」

「進吉がわしに会いたいと？ 店に来ればいつでも話を聞くがな」

男は、右手中指にはめた指輪で、カウンターの upper を叩いた。カッソンという乾いた音が店内に響き渡った。

「あんたがどれほどのお人かは知らないが、てめえんとこの若いもんが起こした不始末の話なんだ。出向くのはそっちじゃねえんですかい？ こうして迎えに来ているんですよ。今すぐ来られないういうなら、今夜にでも、リージェンシー新宿にご足労願います」

嵯峨野は少し考えていたが、「分かった」と返事した。

「では、七時半に若いもんを迎えによこしますんで」

「いいだらう」

男は唇の横にかすかな笑みを浮かべると、ゆっくり店の出口のほうに向かった。

出る間際、振り返ってこう言った。

「ところで、この店には、今評判のフゲン ったのは置いてない

のかね」

「あいにく品切れです」

創司が答えた。

「勃<sup>た</sup>たないなら、もつとましな薬を調合してさしあげるが」  
嵯峨野が言った。

男は数秒、殺意さえ感じる鋭い視線を嵯峨野に向けていたが、  
「七時半に来る」と念を押し、店を出ていった。

痩せて背の高いほうの男は、最後まで一言も喋らなかつた。金  
バツジの男とどちらが格上なのか、創司にはよく分からなかつた。  
男たちの姿が路地の雑踏の中へ消えるのを見届けてから、創司  
は嵯峨野に訊いた。

「きじま組ってなんですか？」

「説明はいらんだろう。そつち方面の連中さ」

「師匠とどういう関係があるんですか？」

「今は何も無い。ただ、組長の貴島進吉って男、昔、一緒に仕事  
をしていたことがあつてな。命を救つてやったこともある。やつ  
がへまをしてチンピラに刺されたとき、応急処置をしてやった。  
わしの処置がなかつたら、手遅れで命を落としておつたらう。そ  
ういう関係だ。もう三十年近く、顔も見えていない」

暴力団の組長と、かつて「一緒に仕事をしていた」とは穏やか  
ではないが、そのことについては創司は何も訊かなかつた。今ま  
でも、嵯峨野の過去について、自分からは突っ込んで訊いたこと  
はない。

今の嵯峨野の生き様を見ていれば、一言では言えない複雑な過  
去があつたのだらうということくらいは想像がつく。弟子として  
気にならないと言えば嘘になるが、師匠の過去を覗くような資格  
は、自分にはまだないと思つていた。

しかし、現在のこととなれば別だ。弟子として、尊敬する師匠

に危険が迫るのを見過ごすわけにはいかない。

「呼び出しに応じるんですか？ 宇川さんが何かしでかしたとしても、もうクビにしているし、店とは関係ないでしょう」

「いや、しでかしたのは宇川がうちで働いていたときのことだろうし、どうせ薬にまつわることだろう。やつが何をしていたのか、わしも知っておく必要があるしな」

「そのことです……」

創司は、言いそびれていた宇川と謎の少女のことを説明した。

宇川が顧客リストを少女に売り渡していたこと。そのリストはどうやら、フゲン という怪しい薬を売りつけるために利用されたいらしいこと。そして、創司が仕掛けた罠に、少女が今、のってきていること。

嵯峨野は黙って耳を傾けていた。

最後に、創司はこう付け加えた。

「師匠、今夜の呼び出し、私もお供します」

「ボディガードのつもりか？ おまえのなまくら中国拳法に助けられるほど、わしはまだもうろくしておらんわ」

嵯峨野は苦笑しながら言った。

「いえ、暴力団相手に立ち回る自信はありませんよ。もつとも、向こうも、命の恩人である師匠にそうそう手を出すようなことはないと思います。それよりも、何があつたのか知りたいんです。店のお客様に迷惑がかかっているなら、私も事実を知っておかなければなりませんし」

数秒考え込んでいたが、嵯峨野は「いいだろう」と答えた。

「だがな、連中にはその女のことは黙っている」

「もちろんです」

創司としても、背景が呑み込めないうちから、暴力団にあの少女のことを売るようなことはしたくなかったので、嵯峨野の言葉

に内心ほっとした。

そのとき、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。また自殺だろうか……。

新宿歌舞伎町の雑居ビル屋上でガソリンをかぶり、火をつけた上で投身自殺した男は、中堅芸能プロダクションの副社長だった。CPUゼラのミッチの後を追うように、ミッチの葬儀の日にマネジャーの濱口が部屋で首吊り自殺。歌舞伎町のソープラントではテレビ局のプロデューサーが首を切り自殺。このところ芸能界関係者の自殺が相次いでいる。

直接芸能界の人間とは言えないが、ゼラのミッチの後追いと見られる若い女性ファンも数人、自殺をしていた。

しかも、それらの自殺は、この新宿を中心に起きていて、偶然にも二件の自殺現場に創司は遭遇している。

客が店に入ってきた。

「えーと、おたくにはフゲン はないですか？」

気弱そうな中年男性が、上目遣いで創司に訊いた。

「あいにくですが、うちでは扱っておりません」

創司は慇懃に答えた。

五〇二号室のドアを開けると、中では鑑識課員が二人、まだ指紋や遺留品の捜査を続けていた。

「郵便受けには二週間前の消印の郵便物が残されています。管理人の話でも、ここ二週間くらいはまったく見かけた記憶がないそうです」

同行した麻布東署の担当刑事が、高砂警視に言った。

「失踪か……」

高砂は部屋の中を見渡しながら、呟くように言った。

「自殺して発見されていないという線もありますね。海へ身を投げたとか、樹海へ入って行ったとか……」

所轄署の刑事の言葉を遮って、高砂はすぐに打ち消した。

「ここにキャスターの跡があるじゃないか。遺体を誰かが運び出したのかもしれない。だとすれば、プロの仕事だな……それも超一級のプロの」

そこまで喋って、高砂は急に顔を曇らせた。

「何かお心当たりでも？」

刑事の問いかけに、高砂は答えなかった。

リージェンシー新宿のロビーは数階上まで吹き抜けになっている。ロビーは二階にあり、三、四階は飲食店街。客室は七階以上の階にある。

貴島組の迎えの者に先導され、嵯峨野と創司は、人が行き来するロビーを抜けてエレベーターホールに向かっていた。

作務衣さむえを着ている嵯峨野は、こういう場所では人目を引く。組の男は周囲の視線から嵯峨野を隠すようにぴったりと寄り添って歩いた。

そのとき、エレベーターホールから、紺色のスーツを着た若い女がこちらに歩いてきた。

女は何か慌てている様子で、落ち着きなく周囲に視線を配っている。

創司はすぐに彼女の異常に気づいた。

まだあどけなさの残る顔は青ざめ、身体からは、乱れた邪気が発散していた。恐らく、嵯峨野もそれに気づいているだろう。

創司はその後ろ姿をさりげなく目で追いかけたが、女はホール



に出ると、すぐに外へ出ていった。

エレベーターで三十三階まで登り、通路のいちばん奥の一室に案内された。

スイートルームの奥の部屋に、初老の男と、昼間店に來た長身の痩せた男が待っていた。

「わざわざご足労願いまして恐縮です、総代。……いや、今は普通に『先生』とでもお呼びしましょう」

初老の男がソファから立ち上がって嵯峨野を出迎えたので、そばにいた背の高い男も慌てて立ち上がった。

「元氣そうだな、進吉」

「おかげさまで、こうして生きながらえてますよ」

日焼けした顔には、深い皺が何本か刻まれている。白目がやや濁っていて、あまり健康そうには見えなかったが、目の光には底知れぬ暗さが宿り、堅気でないことはすぐに分かる。

貴島は嵯峨野をソファに案内しながら、創司のほうに目を向けた。

「こちらは？」

「弟子の守安だ」

「驚きましたね。総代……いや、先生はもう、生涯弟子はとらないと思っていましたか」

「そのつもりだったが、この歳になって、気が変わった」

「そうですか。……まあ、先生が信頼されているお弟子さんならいいでしょう。」

これは私の秘書で酒見さけみといっています。腕は立つんですが、ときどき余計なことをするのが欠点ですね。何か先生に失礼を働いたりしていないといいのですが」

貴島は痩せた長身の男を指さして言った。

「いや」

嵯峨野はぶつきらぼうにそう答えると、ソファに腰を下ろした。酒見という長身の男は、店に来たときは一言も喋らず、金バッジの男の後ろに立っていたただけだったが、組の中でのポジションはかなり上のほうにあるのだろうか。

貴島は部屋の中に酒見だけを残すと、あとの男たちは全員部屋の外に出してドアを閉めた。

「三十年ぶりくらいになるんだろうが、三十年分の挨拶をしていたら夜が明ける。話というのは何だ」

嵯峨野がそう切り出すと、貴島は安楽椅子に座り直した。

改めて嵯峨野を正面から見据え、かすれてはいるが、明瞭な発声で話し始めた。

「いきなりですが、先生はフゲン というものをご存じですか？」

「名前だけはな。それがおまえさんの商売と関係あるのかね？」

「ええ。ただ、どう関係しているのか、先生にお話するつもりはありません。今さら先生を裏の世界に引き込むつもりはありません。どうか、訊いたことだけに答えただけませんか？」

嵯峨野は、今度は返事をしなかった。

控えていた酒見が動こうとしたのを、貴島は目で制し、かまわず続けた。

「フゲン の実物を見たことはありませんか？」

「ない」

「これなんです」

そう言うと、貴島は懐から薬包紙に包まれたものを取り出し、テーブルの上に広げた。

中から、黄土色の薬が現れた。かなり大きく、錠剤と言うよりは丸薬と呼んだほうがいい。完全な球形ではなく、いびつな楕円形だ。

「ずいぶんでかいんだな」

嵯峨野は少し身を乗り出して、薬包紙ごとその丸薬を目の前に持ち上げた。

軽くにおいを嗅いでみる。

「先生くらいになると、においだけで成分が分かるんですか？」  
貴島が興味深そうに訊いた。

「……まあ、ニンニク抹とケイヒくらいは分かるかな。フゲンはデマだと聞いている。これが本物だという証拠は？ 試してみたのか？」

「いいえ。今では私の手元にもそれ一つしか残っていません。フゲンは回収されたんです」

「どういうことだ。回収されたということは、それまではおまえさんたちが闇で流通させていたということか？」

「お答えしかねます。先ほども申しましたように、こちらの質問にだけ答えてください。先生は本当にこれを見るのは初めてなんですね？」

「ああ」

「そちらの兄さんは？」

貴島は創司のほうを見た。

「私も、単なる噂だと思っていました。もともと、噂にのせて、得体の知れないインチキ薬を高く売りつける商売があったかどうかまでは分かりませんが」

創司の挑戦的な言葉を無視して、貴島は嵯峨野のほうに向き直った。

「先生もお弟子さんも、フゲンなどご存じないとおっしゃる。では、質問を変えましょう。頼田よりたという男をご存じですか？ 先生の店をよく利用していたらしいんですが」

「名前を言われても分からんな。患者以外は名前など訊かんしな」  
「角刈りの、まだ二十代の男です」

「分かん。それがどうしたんだ？」

「頼田はうちの若い者もんです。先日、死にました」

貴島は淡々と告げた。

「てめえの脳天にチャカあてて、ぶっ放したんです。そのとき、隣の部屋には組員がいましたし、自殺に間違いはありません。チャカの出所を調べられると面倒なんで、死体は裏で始末しました  
が」

部屋の中に、数秒の沈黙が流れた。

嵯峨野が何も言わないので、貴島はさらに話を続けた。

「このフゲン は、そいつが持っていたものです。しかし、やつのような三下さんしたに、この薬は指一本触れさせてません。まして、やつにはこれを買う金もありません。フゲン の闇価格をご存じですか？ 一錠三百万円です」

「三百万？」

さすがに嵯峨野も驚いて訊き返した。

「ええ。それでも売れたんですよ。信じられないかもしれませんが、買うやつがいるんです。回春効果だけでそれほどの金額を払うとは思えませんから、よほどいいんでしょうね。二度、三度と買うんです。三回買えば九百万ですよ。薬三錠が最高級のベンツと同じ値段つてわけです。世の中不況だのなんだの言ってますが、あるところにはあるんですよ。」

それに、年寄りには金の価値観が違うんですね。あと何年生きられるか分からないですから。三百万で狂おしいほどの快感を得られるなら、高くはないでしょう。」

そのフゲンを、なぜ頼田のような若造が持っていたのか……それが分からないんですよ。当の本人が自殺した以上、どこから手に入れたのか、聞き出すわけにもいきませんしね。」

いろいろ調べましたよ。この世界では信用がすべてですから。」

そして浮かんできたのが、どうやらフゲン をべらぼうに安い値段で流しているグループがいるらしいということです。頼田もそこから手に入れたらしいんですよ。

で、そのグループのことを調べていくうちに、先生の店が浮かび上がってきたってわけです」

「見当外れだな。言ったように、わしはフゲン はおろか、フゲン という薬のこともよく知らん」

「先生がご存じなくとも、宇川……おたくの番頭さんは知っていませんじゃないですか？」

貴島が、左の頬を指でさすりながら言った。大きな傷跡が残っている。その古傷を確かめるように、二度三度とさする。

「宇川はクビにした」

「そうらしいですね。なぜです？」

「やつがフゲン という薬をわしに隠れて仕入れ、客に定価以上で売りさばいていたことが分かったからだ」

「フゲン だけでなく、ハルシオンやリタリン、クロロホルムまで売ってましたよ。インターネットを使ってね。そのへんまでは、私も、もう突き止めています。その中にフゲンはなかったのか？ それを知りたいんです」

「分からんな」

「本当ですか？」

貴島は念を押すように、少し身を乗り出しながら言った。

「何度も言わせるな。わしは宇川が裏で何をしていたか知らん」  
「宇川ってのは、ムジナさんの息子ですよね？」

「……そうだ。あいつとの縁で、わしが預かっていた。だが、何を教えても、ものにならんものはならん。性根が腐りきっている。ずっと我慢してきたが、見切りをつけた。」

ただ、これはわしの勘だがな、宇川は大したタマじゃない。品

薄の市販薬や、医者処方がないと買えない薬を高値で横流しする程度が精一杯だろう。そもそも、そのフゲン という薬は、どこから仕入れるんだ？」

「そちらからの質問にはお答えできません。これは先生の身を案じてのことです」

貴島はそれまでよりきつい口調で言った。

「よかろう。だが、わしらにはこれ以上のことはまったく分からん」

「では、宇川に直接訊いてみるしかありませんね。やつはどこにいますか？」

「家におらんのか？」

「ええ。ずっと帰ってませんね。インターネットの裏サイトにも、このところ出没した気配がありません」

「それではわしにも分からん。あいつが店の客に怪しげなものを斡旋していたなら、わしもその背景をきちんと知っておきたい。

分かったら教えてもらえんかね。だが、父親には関わるな。やつは癌でな。もう長くはない。息子のことも、わしに託してからは完全に縁を切っている」

貴島はそれには答えず、黙って嵯峨野を見つめ返した。

数秒の沈黙の後、貴島は立ち上がった。

「ご足労おかけしましたね。では、宇川に関しては私らにお任せいただけるということでは」

貴島が立ち上がったのを合図に、酒見が近づいてきて、ドアのほうへと促した。

貴島は奥の部屋からは出ようとしなかった。

嵯峨野と創司は、無言のままホテルの廊下へと出た。

酒見は最後まで一言も喋らず、そのまま部屋に残った。ここでは貴島のボディガード役なのだろう。

来たときと同じように、若い組員が付き添った。

エレベーターホールまで来たとき、嵯峨野は若い男に告げた。

「ここで結構。わしらは勝手に帰る」

エレベーターのドアが開いた。

中に入る二人を見届けると、男は軽く頷きながら、そのまま見送った。

ドアが閉まり、階下へと箱が降下し始めるなり、嵯峨野は独り言のように呟いた。

「血のにおいがする」

創司は黙っていた。

今の師匠と貴島の会話の中で、宇川の父親を二人が知っている様子だったのが気になった。宇川の親のことなど、今まで考えたこともなかった。

「師匠。宇川さんの父親って……」

「血のにおいがする」

嵯峨野は創司の問いを遮るように、同じ言葉を繰り返した。

拒絶の響きを含んでいたので、創司はそれ以上は訊けなかった。

血のにおい…… 比喻だと思っていた師匠のその言葉が、現実の「におい」のことだと知ったのは、翌日になってからだった。

翌日、昼のニュースで、リージェンシー新宿の一室から変死体が発見されたことが報じられた。

バスルームで、初老の男が全裸のまま、血塗れで死んでいた。

バスタブに湯を張り、左手首、右の首筋を出刃包丁で切っていた。警察は、自殺、他殺両方の面から調査を進めているという。

現場になった部屋は、創司が嵯峨野に付き添って貴島組の組長

を訪れたのと同じ階にあった。死亡推定時刻も、ちょうど組長と話をしていた時間に近い。

エレベーターに乗った直後、嵯峨野が「血のにおいがする」と言ったのは、まさにこのことだったのだ。

創司は嵯峨野に確かめた。

「ほう。わしの鼻も、まだまだ捨てたもんじゃないな」

嵯峨野はとりたてて驚くでもなく、そう答えただけだった。

「この前、私がベルベットで出くわしたのと同じです。男が全裸のまま頸動脈を切つて自殺。おかしいですよ。何か狂ってる。なぜ、わざわざそんなみつともない格好で自殺するんです？このところ、ほとんど毎日のように誰かが自殺しているんですよ」「そうだな」

嵯峨野は相変わらず平然としていた。

「狂っていると言えば、今の世の中全体が狂っている。生きていたくないというやつが増えても、それほどおかしくないだろう」

「でも……」

納得できないが、創司には、どう言葉を続けていいのか分からなかった。

普段、創司は嵯峨野に口答えすることはない。絶対服従ということではないが、師匠の言葉にはいつも重みがあり、咀嚼するだけで精一杯だった。

嵯峨野の世捨て人のような生き方に対しても、共感こそすれ、反発を感じることはなかった。しかし、今日は無性にぶつかっていききたい衝動に駆られる。

師匠の言動に、いつもとは違う、自然体ではない、演技した二ヒリズムのにおいを感じた。

そのとき、腰の携帯電話が振動して着信を知らせた。

「はい」



出ると、相手は一瞬間を置いてから告げた。

先日、フゲンのことでお電話した者です。申し訳ありません。例のお約束、キャンセルとさせていただきます

あの女だ。頭の中を、様々な記憶と想像が駆けめぐった。

「なぜ？」

すみません。失礼します

一方的にそう告げると、相手は電話を切った。

勘づかれたのだろうか。

考えが整理できないうちに、入り口のほうで人影が動いた。

見ると、一目で客ではないと分かる中年男性の二人組が店に入  
って来るところだった。

男のうちの一人は、商品棚には目もくれず、まっすぐに創司の  
前に歩み寄ってきた。

「どういう偶然ですかね。またお会いするとは」

男は新宿東署の刑事だった。

先日、ソープラントで客がナイフで自分の頸動脈を切って自殺  
した事件のとき、事情聴取をした担当者だった。

「偶然ですよ」

創司は落ち着いた口調でそう答えた。

「客ではなさそうだな」

隣にいた嵯峨野が、創司にとも、刑事にともとれるような間合  
いで声をかけてきた。

刑事は警察手帳を取り出し、嵯峨野に提示した。

「おたくの店員さんは、先日のソープラント自殺事件で事情聴取  
させていただきましたね。今日はそのこととは別件でやってきた  
んですが、少しお話を伺わせてください」

もう一人の、眼鏡をかけた刑事が、鞆の中から何かを取り出し、  
嵯峨野の前に突き出した。

「この男性をご存じでしょうか？」

キャビネ版くらいの大きさの写真だった。隣にいた創司も、自然と覗き込んだ。

写真には、血に汚れた生首のようなものが写っていた。首はつながっているが、目を開き、薄くなった髪は濡れて額に貼り付いている。

「うちによく来る客の一人だ。名前は確か……」

嵯峨野が冷静な声で答え始めた。

「本多さんです。魚蝶ウナギのご主人の」

創司が後を続けた。

魚蝶というのは、創司が毎日のように食事を食べさせてもらっている小料理屋の屋号だ。本多はその主人である。昨日は休業日だったが、一昨日の夜は普段どおり店で働いている姿を見ている。

「殺されたんですか？」

創司が写真を持っているほうの刑事に訊いた。

刑事は、嵯峨野から創司のほうに向き直って答えた。

「まだ分からないんですよ。だから調べているわけですが。今朝方、ホテルリージェンシー新宿の部屋で、こういう状態で死んでいるのが発見されました。本多さんがこの店に最後に来たのはいつですか？」

どうやら創司のほうが多くの情報を持っているらしいと踏んだのか、二人の刑事は創司を挟むように立ち位置を変えた。

「ここで対応したのは一か月近く前だと思えますが、私は一昨日の夜、魚蝶で会っています」

「呑みに行ったんですか？」

「いえ、そういうわけではなくて……」

創司は、毎晩のように魚蝶で簡単な夕食を食べさせてもらって

いることを説明した。

「賄<sup>まかな</sup>いみたいなものですか。で、一昨日の晩は、特に変わった様子などはなかったですかね？」

「いつもと変わりないように見えましたけど。少なくとも肉体的にはそんなに調子悪くなさそうでしたが……」

心の問題までは分からない……と続けたいところだったがやめた。

主人の身体から漏れ出ている「気」のにおいが妙だったことを覚えている。しかし、そんなことこそ、この刑事に説明しても分からないだろう。

「奥さんにうかがってもね、自殺する動機なんてまったく考えられないっていうんですよ。昨日は、月に二回の休みの日で、ご主人は午後から、パチンコに行くと言って出たきり戻らなかったそうですね。で、遺体は今、司法解剖に回っているんですが、この店でよく薬を買っていたというんで、もしかして、最近、なんか変わった薬とか買っていたかと思ひましてね。睡眠薬とか抗鬱剤とか……」

「うちは薬局といっても漢方専門ですし、出来合いの商品をただ売るのではなくて、調合を主体にしています。特に魚蝶のご主人には、いつも専門の調合をしていましたし、ご主人が市販薬の類をうちから買っていかれることは、まず、なかったですよ」

「どんな調合ですか？ 我々素人にも分かるように説明してもらえませんか」

そう訊かれ、創司は困って嵯峨野のほうを見た。

客のプライバシーを軽々しく口にするのを、師匠が快く思うはずはない。

創司の困惑を見て取り、嵯峨野が乾いた声で告げた。

「特に変わった処方なしとらん。立ち仕事なんで、腰や背中に疲

労がたまる。簡単に言えば、そうした疲れを抜く処方だ」

刑事たちは、嵯峨野のほうに不審そうな目を向けた。

しばらく間を置いてから、眼鏡をかけたほうの刑事が言った。

「このところ、新宿界隈で奇妙な自殺が続いてましてね。どのケースも自殺の原因が分からないんですよ。何か妙な薬でも出回っているんじゃないかという説が出てまして……」

「うちとは関係がない」

嵯峨野がぴしゃりとはねつけた。

「誰も関係があるとは言っていないませんよ。ただ、何かお心当たりがあれば、どんな話でもいいから聴かせてほしいんです。噂話のようなものでもいいんですがね……」

「何もない」

刑事たちはさらにいくつか質問を重ねたが、嵯峨野も創司も何一つ目新しい情報を提供しないので、十分ほどで引き上げていった。

刑事たちの姿が完全に見えなくなってから、創司は嵯峨野に言った。

「やはり、宇川さんを通して、この店はフゲンの流通に間接的にでも関わっていたんでしょか。宇川さんのこと、調べなくてもいいんですか？」

嵯峨野は険しい顔をしたまま、返事をしなかった。

「……わが社としてはまったく寝耳に水のことであり、ただちに法的な対抗手段をとるつもりであります……」

テレビの画面では、白髪の紳士がぼそぼそと聞き取れないような声で反論を試みていた。が、画面はすぐに異様な光景に切り替わった。

薄暗い地下室のような場所に並べられたウミガメの甲羅。隣には動物の角つののようなものも置かれている。

警察はすでに、しゅんりんどう 憲麟堂の工場倉庫にて、ワシントン条約付属書Ⅰで輸入が厳しく禁止されているアオウミガメ、タイマイの甲羅や冷凍肉、クロサイの角などを発見しており、生産現場の模様も公開されました。

憲麟堂のヒット商品『フゲン』にこれら禁輸品から抽出された原料が使われていたかどうかは不明ですが、密輸品を隠し持っていたことで、憲麟堂には三か月の業務停止命令が下されました。分類上はただの栄養補助食品でありながら、精力回復効果があると噂されたフゲンの爆発的なブームは、品薄状態から、闇取引までも生み出していました。これで事実上、今後は生産がでないこととなります……

アナウンサーが淡々とした口調で原稿を読み上げた。まだ客の入っていない魚蝶の店内で、創司は店の奥に置かれた小さなテレビの画面を見つめていた。開店時間の五時半にはまだ数分あった。

魚蝶の主人が謎の自殺を遂げてから、店は数日閉店していたが、一週間も経たないうちに女将が一人で店を再開させた。板場では、どこから見つけてきたのか、若い板前が多少ぎこちなく包丁をふるっている。

ニユースは政局の話題に移っている。

ひじきの煮付けと納豆という夕飯を済ませ、創司は開店準備に忙しい女将に改めて声をかけた。

「ご主人があんなことになって、まだ、シヨックが残ってらっしゃるでしょうに、凶々しくいつものように押しかけてきてすみません」

「嬉しいよ、そのほうが。近所の連中も、なんだか声をひそめて

話している感じでき、創ちゃんみたいに、普通にしてくれるほうが、あたしはほっとするよ」

女将は、今まであまり見せたことのない種類の笑顔を作ってそう言った。

創司は、少し迷ったが、訊いてみることにした。

「ご主人、やはり、自殺ということになったんですか？」

「警察はそう言ってるね。自殺か、無理心中のしそこないだって」「無理心中？」

「あの人が死んでたホテルの部屋ね。女の名前で予約されてたんだってさ。フロント係が、ちゃんとチェックインしたときのことも覚えててね。なんでも三十前後くらいの、背の高い、芸能人みたいな派手な女だったって」

「殺された可能性はないんですか？ 警察はなぜ自殺だと断定したんですか？」

「首に突き立てられた出刃包丁が、うちの人のもんだってことと、なんでも、刃先の進入角度っていうのかい？ それか、他人が刺したとは思えないんだってさ。出刃はうちの人か逆手で固く握りしめていたっていうしね。」

警察はね、ただのホテル嬢を買っただったら、店から出刃包丁を持って行くわけがないって言うんだよ。多分、前からつきあっていた女と、最近、関係がこじれてきて、清算しようとしたんだらうって。無理心中をしようとしたのが、女のほうには逃げられて、自分だけ死んだんじゃないかって。

そんなところだよ、きっと。女癖は悪かったからね。私とは三度目の結婚だったけど、その後も、その前も、いろいろあったんだ。子供産ませた女もいたし……」

「フロントが目撃した三十前後で背の高い派手な女性というのに、奥さんは心当たりはないんですか？」

「あの人の女は何人が知っているけれど、三十くらいで背が高いというのはいないね。私が知ってるのは、みんな四十とか五十過ぎだし、私より背が高い女も一人もいなかったね。あの人、小柄で華奢なタイプが好みなんだよ。フロントが見たっていうのは、何かの間違いじゃないかね」

創司はふと、あのとき、エレベーターホールですれ違った若い女のことを思い出した。黒い髪を背中の中程まで伸ばした、まだ高校生くらいにしか見えない少女。だが、彼女は背は特に高くはなかった。真つ青な顔をしていたので印象に残っているのだが、何か関係があったのだろうか。

「女に殺されたっていうなら、まだ諦めもつくよ。身から出た錆だからね。でも、そうじゃないんだ。自分で首を刺したんだからね。やりきれないね。残されたあたしは馬鹿みたいじゃないか。……まあ、あんたにこんなこと話しても、みつともないだけだ……」

そうやって、女将はむき出しの太い腕を、自慢のぬかみそ樽に突っ込み、自家製の沢庵を一本引き抜いた。

「とにかく、あとは警察に任せておけばいいですよ」

女将には、そう言うのが精一杯だった。

ちょうどタイミングよく、最初の客が入ってきたので、創司は入れ替わりに店を出た。

何かが起きている。

そして、自分はもはやその「何か」と関係してしまっている。

逃げられないのなら、立ち向かうしかないのだろうか。しかし、立ち向かうべきその「何か」が見えない。

創司は重苦しいものを感じながら、店に戻っていった。

続きは河出書房新社刊『黒い林檎』でお楽しみください。

二〇〇一年十月発売 一四〇〇円

ISBN 4・309・01421・6

<http://kuroiringo.com> からご予約、通販申し込みができます。